

# チャールズ・ブースのロンドン調査について

石田 忠

## 一 序

一 「チャールズ・ブースははるかに統計家以上の人であつた。彼は、私の判断では、十九世紀の社会科学の方法論における最も大胆な先駆者であり、また最大の成果をあげた人であつた。」ビクトリス・ウエブ、Beatrice Webb (1858~1943) は『我が徒弟時代<sup>(1)</sup>』のなかでこう云つてゐる。ここでビクトリスが述べてゐるのは、いうまでもなく、ロンドンにおける民衆の生活と労働について一八八六年にはじまる十七ヶ年に亘つて調査を行い、その結果を同じ数の書冊<sup>(2)</sup>に出版したチャールズ・ブース Charles Booth (1840~1916) についてである。

(一) Beatrice Webb, *My Apprenticeship*, London, 1926, p. 247. 本書 (Chap. V, A Grand Inquest into the Condition of the People of London. pp. 216~236) に於てブースのロンドン調査について、その起源、方法及び結果の分析的な叙述がみられる。

(二) Charles Booth, *Life and Labour of the People in London* (1st Series, Poverty, 4 volumes, 2nd, Industry, 5 volumes), London, 1901-1903. 本書のロンドン調査について

volumes, 3rd, Religious Influences, 7 volumes, Final volume, Notes on Social Influence and Conclusion) London, 1902~3.

チャールズ・ブースは船主として成功した実業家であつた。<sup>(1)</sup>しかしブースの名が有名になり、イギリス社会史に独自の地位を与えられることになつたのは、ロンドンの民衆の状態を調査したことによつてであつた。そしてブースはこの調査のなかで、社会構造の探求へ「観察、推論そして実証という方法」を適用しようと試みた。このことによつて彼は社会研究に新しい方法を導入したのである。

(1) 二十世紀初頭、イギリスにおける客船航路を制御した「五巨頭」のなかにチャールズ・ブースの名が見出される。(C. R. Fay, Great Britain from Adam Smith to the Present Day, London, 1928, 5th ed., 1950, p. 164.)

二 当時、世界で最も大きくまたゆたかであるといわれた都市ロンドンの住民の三〇%の多くがぎりぎりの生存水準の、またはこれより以下の、生活を余儀なくされているということ<sup>(1)</sup>、過住 (overcrowding) の程度や、いろいろな近隣社会を特色づける不潔、むさぐるしさ、噪音及び風紀のみだれなどが、そこに住む人々の所得の大きさと安定度とに伴つて上下するということ、死亡率及び出生率の上下さえもが貧困の程度に対応しているということ<sup>(2)</sup>、そして更に世帯主の職業の性格、雇用の不規則性、賃金の低いことなどが貧困と密接な関係を有するということ、などが統計による実証の権威をもつて明かにされたことは支配階級にとつて一つのショックであつた。

(1) 「我々の全調査の結果次のは確かであると考へてよい。即ち、人口の三分の一は、小家族の場合ならして平均二一志から二二志(或はもつと大きな家族の場合二五志か二六志まで)の所得を有するにすぎず、また多くの場合この水準より下に

落ちており、貧乏線上またはそれに近いところにあるか、或はそれより下にある。いま一つ、これより恐らくは一〇志以上即ち一年をならして一週二五志から三五志を有する三分の一がある。これには賃金稼得者に加えて、多くの小売業者や小雇用主が算入されるであろう。そして最後の三分の一にはこれらより暮し向きのよい人々が全部入ることになる。……最初のものは多くは窮乏 (want) に瘦せさらばえ、もし貧乏 (poverty) とは余裕のないことだと定義されるのであれば、全部が貧乏に

---

らしていることになる。二番目のものは堅実な労働階級の愉快 (comfort) を享受している。そして三番目のグループでは、生活の最悪のものでも潤沢 (plenty) に暮らしており、最上のもものは贅沢 (luxury) に暮らしている。」(Charles Booth, op. cit., Industry, V, pp. 324~5)

(2) 「我々の行つた階級区分は主として外見で判断した貧困の程度又はその逆に基いたものであつた。そしてこの階級が下になると結婚はより早くなり又子供の数はより多くなるので、これらの特徴が、それらの階級に伴う貧困の原因であるのか或は結果であるのかは十分問題になるところである。ある程度において原因であることは疑いないが、より決定的には結果であるように思われる。結婚は社会的又は産業的な諸理由のために早いのであつて、原則として、無思慮のせいではない。そして出生の数は肉体的な原因——一部には若い元氣、一部には男女ともに肉体労働と乏しい食事が身体に与える影響——から殆ど不可避免に多くなる。精神的な特徴及び慣習も同じ方向にはたらく、そしてこの流れに抗するほどに分別をはたらかせることが可能だとは思われない。この方向には貧困問題の解決を求むべくもないのである。」(Final volume, pp. 19~20.)

三 ブース以前にあつても「中間及び上流階級の人々は漠然と『貧乏人』(“the poor”)と呼ばれる一群の人々の存在を知つてはいたが、その生活状態については殆ど何も分つておらず、最悪のものがあるらしいと考へていた。」<sup>(1)</sup> 彼らの貧困者との接触は博愛主義を通じて保たれていたにすぎなかつたから、貧困は自らその極限の形態に

おいてのみとらえられる傾向があつた。たとえば、ヘンリー・メイヒュー Henry Mayhew (1812~1887) の London Labour and the London Poor (1851~64) においても、貧困者は放蕩者又は普通以下のものと混同されているようであり、そこでは露店商人、香具師、道路清掃人夫、乞食又は売春婦などだけがとりあげられ、ロンドンの貧困者とはこれらの人々につきるかのような感じを与えている。

(1) A. F. Wells, The Local Social Survey in Great Britain, London, 1935, p. 20.

そして他方には、ヴィクトリアの繁栄のなかで育まれた樂觀的な風潮があつた。支配階級の多くは、ロバーツ・ギフィン Robert Gilfen (1837~1910) とともに「労働階級の各人の所得が大きく増大したのに、彼らの主要な消費財の価格は却つて低下した。これらの事実からして彼らの生活は極めてよくなつたと考えても、それは死亡率の低下、日用品の消費の増大、一般教育の改善、犯罪と被救恤的窮乏の減少、貯蓄銀行の預金者の激増、その他一般的な福祉の指標となる諸事実を示す統計によつて十分うらづけられることだ」と考<sup>(1)</sup>えた。ギフインは一八八六年「今日異常な注目をあびている問題」に再びふれて、「こゝ五十年間に労働階級に起つたことは正に改善と呼ばれてよいもの、といふよりはむしろ極めてはつきりした革命である。五十年のうちに、嘗ては飢餓のふちにあり、ことばにつくせぬ窮乏に喘いだ数百万の人々にかわつて、新しく数百万の熟練労働者及び賃金のよい不熟練労働者をもたらしたところの変化に示されている新しい可能性は、博愛主義者及び公的な立場にある人々の希望をかりたてないではおかない」と結<sup>(2)</sup>論したのである。

(1) Robert Gilfen, The Progress of the Working Classes in the Last Half Century, Journal of the Statistical So-

ciety, Vol. 46—1883, p. 620.

(2) Robert Giffen, *Further Notes on the Progress of the Working Classes in the Last Half Century*, J. R. S. S., Vol. 49—1886, p. 29.

これらはいづれも貧困の現実から支配階級の目をそらさせ、いわれない自己満足に安んぜしめるものであつた。しかるにブースの現実。それは正に警策的な効果をもたらしたのである。

四 しかも「現に在る貧困の量についての新しい、そして測定に基く観念をもたらしたことがブースの仕事の唯一の成果ではなかつた。貧困原因についての観念にも同時に変化がもたらされ、それは教養ある見解をもつた重要な部層を十九世紀前半の社会的思考のもつていた諸仮説から解放し始めたのである。」<sup>(1)</sup>「マルサスの経済学で育てられ、所得と生活の安定とが増大する毎に、不可避的に労働階級家族には子供がふえると教えこまれていた人々は、貧困と過住とが大きければ大きい程に、そして特に生活の不安が大きければ大きい程に子供を産むに無計画となるといふことを見ては正に度を失わんばかりであつた。」<sup>(2)</sup>

(1) W. H. B. Court, *A Concise Economic History of Britain, From 1750 to Recent Times*, London, 1954, p. 277.

(2) Beatrice Webb, *op. cit.*, p. 249.

かくては、貧困を専ら個人的な徳性又は能力に結びつけて考える、当時に支配的な貧困観は大きくゆるがざるを得なかつた。そして他方では支配階級の間既に散在していた、ピアトリス・ウェブの所謂「階級的な罪意識」<sup>(1)</sup> (class consciousness of sin) が一段と強められることになつた。即ち「途方もない規模で地代・利子及び利潤を生みだし

た産業組織が、大英國の住民の大部分に対しては、見苦しからぬ生活と穩当な条件とを与えることに失敗したのではないかという——やがては確信となつた——不安」がこれである。或はこのような意識を、K・ハチスンに倣つて、支配階級の間の「社会的良心」(social conscience)と呼ぶこともできよう。

(1) *Ibid.*, p. 180.

(2) Keith Hutchison, *The Decline and Fall of British Capitalism*, London, 1952, p. 70. 「(十九)世紀末にかけて二つの圧力が結びついて國家の經濟的・社会的な役割を拡大せしめた。即ち、一方には選挙権を与えられた大衆があつた。彼らは社会主義者の綱領を理解し、是認するにはひまがかゝつたが、しかし議會内の彼らの代表を通じて、はつきりした諸改革——産業災害の保護、住宅改善、無料の初等教育、土地貸付け、レクリエーションの時間、雇用と所得の安定との増大——を要求した。これらの諸要求の力を更に強めたのが上流階級の間の社会的良心の成長であつた。これは長い間未知の國であつた労働階級地帯の状態の調査とそれが宣伝とをもたらしたのである。エコノミストが論説『國家社会主義への前進』において嘆じたように、労働者は國家をもつて『最大にして又全体としては最も信頼の置ける労働組合と考えるようになり、又同時に指導階級は憐憫(pity)の情をもつようになつたので、國家は一般的干渉者の性格を帯びるにいらつた』のである。」(pp. 69~70)

このような意識は、既に、シャフツベリ A. A. C. Shaftesbury (1801~85) やチャドウィック E. Chadwick (1800~90)、ディキンズ C. Dickens (1812~70) やカーライル T. Carlyle (1795~1881)、ラスキン J. Ruskin (1819~1900) やモリス W. Morris (1834~1896) に、また晩年のシムン J. Stuart Mill (1806~73) やマルクス Karl Marx (1818~83) と英國における彼の祖述者たちに現われたものであつた。チャールズ・ブリスの調査に基本的な作業仮説——民衆がどのような条件の下に生活しているかということとは主として彼らがどのような条件の下に労働しているかによつてき

まつてくる——を与えたものは正にこの意識にほかならなかつた。そしてブースの仮説は実証された。支配階級の「社会的良心」は次第に成長を速め<sup>(1)</sup>、やがて八〇年代の経済的個人主義は次第に否定されてゆく。「さもなければ我々が無意図的 (involuntarily) に首にぶらさげてゆくよりほかはない」ところの重荷を、意図的 (voluntarily) に肩になつてゆく方法を何か見出すべき時が来ている<sup>(2)</sup>」というブースの危機意識は次第に支配階級の間に浸透して行つた。

(1) 一八八九年のロンドンのドック・ストライキにおいて、ドックの「雇用者は中間階級の意見さえ彼らに反対しているのを感じた。チャールズ・ブースのロンドンの民衆の生活と労働の広範な調査の最初の結果が丁度都合よく公けにされたところであつた。何人もドックの臨時労働者の惨めな生活と労働の状態を弁護することはできなかつた。」(G. D. H. Cole, A Short History of the British Working-Class Movement, 1789~1947, London, 1948, p. 244. 邦訳・II' 一四四頁)。

(2) Charles Booth, Condition and Occupations of the People of East London and Hackney, 1887. J. R. S. S. Vol. 51~1888, p. 300.

**五** ブースは階級構造を分析して「社会問題のかなめ」をなしている一つの階級を見出した。それは極貧者の階級であつた。「この階級からは産業的に得るところが何もない」ばかりでなく、彼らの「労働市場における競争<sup>(1)</sup>」は上位の階級の足をひつぱり、また「被救恤者の給源」となつているところの「余計者<sup>(2)</sup>」にすぎなかつた。

(1) Final Volume, p. 207.

(2) Poverty, I, p. 162.

しかしブースの方法は彼の分析をこゝで止めてしまつた。したがつて彼は「貧困者 (the poor) の貧困は主として

極貧者 (the very poor) の競争の結果である」と見ると同時に、こゝから直ちに対策を導きだした。即ち「この極貧階級を、生きるための日々のたゞかいから全く除去することこそ問題の唯一の解決である。」<sup>(1)</sup> その時は極貧者は貧困者に対する「圧倒的な重荷」(a crushing load) たることをやめ、後者にはより多くの雇用と賃金とがもたらされて、自ら貧困から解放されるだろうとブースは考えた。

(1) Ibid., p. 154.

かくてブースの提案は「生活水準の強制を行つて、誰でもこの水準に達する能力と意志とを有しないかぎり、国家によつて定められる方式でその救済をうけせしめる」ということになつた。それはいわゞ「救貧法の拡張と考えられてよろ」ものであつた。<sup>(1)</sup>

(1) Poverty, I, p. 166.

ブースの提案は極貧階級の「現在の状態の継続を不可能ならしめるために、執拗にして説得的な圧力をかけるとともに、他方に於て、被救恤と自立の中間にあつて『労役場』(workhouse) ということばによつて表わされている意図を実現するような産業共同体 (industrial community) を設置して、彼らをこゝへ導きいれる。」<sup>(1)</sup> というのであつた。この共同体は公私の協力によつて維持され、そこでは農業や練瓦製造やこの共同体の需要をみたすような「産業」が営まれる筈であつた。

(1) Final Volume, pp. 207~8.

しかし「この提案は個人主義者の間にも、又社会主義者の間にも支持者を見出さなかつた。」<sup>(1)</sup>

(1) Beatrice Webb, op. cit., p. 234.

それでは支配階級は事態に対処するに、他に有効な方策をもち合せているのであろうか。そこでブースは一八三四年原則による救貧法行政が貧困者の貧苦に対してどれだけの効果をあげているかを検討する。「労役場へ收容される被救恤者の数の増大をひき起すことなしに居宅救済を減少せしめることは完全に成功した。……(しかし)民衆の状態によつて検討すれば、何か大きな改善が行われたと主張することはできない。民衆は従来ほど貧困ではなくなつたということもなく、又従来以上に自立できるようになつたということもない。被救恤者は少くなつたが、何らかの状態の慈善に依存する人々は些かも減つてはいない。私的慈善は統制を無視し、又慈善団体協会の仕事は、大方は、さもなくば救貧委員に申請するよりほかはない人口に対して今一つの扶助源を与えることになつてゐる。」<sup>(1)</sup>

(1) Religious Influences, II, pp. 52~53.

かくては、「人間生活の最低水準を永久的にひきあげるためには……一つの最低限と認められる水準以下に生活が正に落ちようとする、その点において行政行為及び罰則をもつて干渉すること、そして改善のためのあらゆる機会を提供すること」<sup>(1)</sup>よりほかはないことになる。

(1) Final Volume, p. 208.

民衆の生活が改善さるべきであるならば、「国家干渉」は正当化されねばならない。それが社会主義に対して已を鋭く対立せしめた資本家チャールズ・ブースのことばであり、そこにこそ「個人主義体制」の生きのびる機会があると示されてみれば、この主張が強く支配階級に影響したことは云うまでもない。

かくて我々はやがて一九〇六年の教育（給食）法、八年の老齡年金法、九年の職業紹介法と賃金協議会法、十一年の国民保険法の制定や工場立法の適用範囲の拡大等一連の社会政策の展開期を迎えることになる。「実に今世紀の（イギリス）社会史の特徴となつて来ているものは……国民的最低限政策が行政上にも立法上にも暗黙裡にそして屢々申訳的に採用されて来ているといふことである。」<sup>(1)</sup>

(1) Sidney and Beatrice Webb, *Industrial Democracy*, London, 1897, 1920 ed., p. IX.

こゝに国民的最低限政策とは所得、健康、住居、余暇、教育等々に、何人もこれより以下に落ちることをゆるさるゝてはならないところの、国民としての最低限 (national minimum) を劃定する方策である。「新組合主義」の指導者たちは、ウェブ夫妻らフェビアン (Fabian) の教えるところにしたがつて、労働運動を国民的最低限政策に方向づけた。そして支配階級の選んだ国家干渉の形態も亦、ブースの「救貧法の拡張」によりはこの方向にあつた。かくてイギリス社会政策史は現に見るようなものとなつたのである。

六 こゝに我々はブースの調査のもつた政治的効果の限界を認めることができる。即ち彼は「国家干渉」を正当化することはできた。しかしその形態を決定することはできなかつた。そしてこのことは彼の現実接近の方法に責があるのではなくてはならない。

ロンドンの民衆の状態の調査はブースの方法によつて多くの成果をあげることができた。このことに疑いはないとすれば我々は謙虚にその方法に学ばなければならない。しかし彼の方法が現実接近に一定の限界をもつべきことも亦明かである。もしそうだとすれば、ブースに学ぶとはその方法の内在的批判を試みることでなければならない。

しかし「ロンドンにおける民衆の生活と労働」全十七巻は調査報告書のほかの何ものでもない。したがって我々の仕事は先づこの報告書がいかなる体系をもち又その調査計画がどのようなものであつたかをたしかめることになる。そして次に、ブースは何故このような体系と計画の下にロンドン調査を進めたのであろうかを考えてみる必要がある。このためにはブースにとつてこの調査が何故必要であつたのか、したがって調査に対する彼の態度がどのようなものであつたかど理解されなければならないであろう。第三にはブースの基本的な方法を抽出し、それがいかなるものであつたからこそ、この方法による現実接近に一定の限界がもたらされたのかど分析されなければならない。そしてブースの方法が何故そのようなものとなつたのかど説明され又、その方法が当然もつであらう論理的な矛盾が指摘されなければならない。これらが本篇において試みられることである。

## 二 ブースの生い立ち

チャールズ・ブースは一八四〇年三月三〇日にリヴァプール Liverpool で生れた。その頃リヴァプールは「はかり知れない、そして当時の人々には殆ど無制限なものと思われた発展」<sup>(1)</sup>の過程にあつた。

(1) リヴァプール港を経由する貿易はナポレオン戦争後急速に発展し始めた。たとえばリヴァプールの輸出入総屯数は一八一五年と一八三〇年との間に倍増し、一八四五年までに再度倍増し、一八六〇年までには三度び倍増するという程であつた。しかし七〇年代になつてその勢は漸く緩慢となつた。屯数においては依然として増大をつゞけたが、金額では横這いという状況に入つた。そしてこれは世紀末までつゞくことになつた。二十世紀に入つてから再び急速な拡張を辿つて第一次大戦の勃発を

迎えるの P. 66° (D. Caradog Jones ed., The social survey of Merseyside, 3 vols., London, 1934. Vol. I. pp. 22~23)

「リヴァプールの物語りは古き邑 (borough) が一大商業中心地へにわかに興隆した物語りである<sup>(1)</sup>」港としてのリヴァプールの歴史は遠く十三世紀にさかのぼるが、このふるい港町の発展が急速化したのは十八世紀に入つてからのことであつた。それは先づ一七三〇年<sup>(2)</sup>に始まつた奴隸貿易(即ちイギリス市民による奴隸の売買)によつてもたらされた。

(1) Ibid., p. 52.

(2) この年リヴァプールの最初の奴隸貿易業者がアフリカへ出かけた。一七三〇年には一五隻が、一七五一年には五三隻が、一七七一年には一〇六隻がアフリカへ向つた。しかし奴隸貿易の崩壊は急速であつた。一七九〇年に最高潮に達した奴隸貿易は、それから二十年のうちには全くなくなつてしまつたのである。一八〇七年ジョージ三世の法令によつて奴隸貿易は禁止された。

しかし、云うまでもなく、リヴァプールの繁栄をになつたものは、その後背地における産業革命特にランカシアの木綿工業の発展であつた。原料を求め、又製品の市場を探してリヴァプールの船は世界のいたるところに出かけて行くようになったのである。十九世紀中葉には、この港へ入つてくる主な輸入品は棉花と穀物となり、こゝから出る船には製品と移民とが積みこまれた。

繁栄する貿易は人口の流入をもたらしした。特に「十八世紀末の何十年かはスコットランド、ウエイルズ、アイルランドからの流入が激しかつた。チャールズ・ブーアの祖父トマス・ブーア Thomas Booth が一旗あげようと農村か

らこの港町へ移住した来たのもこの頃であつた。

(1) Ibid., p. 45.

もちろん、「人口の流入が最も大きく行われたのは十九世紀中葉であつた。一八五一年センサスにおける出生地の分析によれば、ランカシア生れはリヴァプールの人口の三分の一弱で、イングランド生れと云うことでも全体の二分の一にすぎなかつた。三分の一はアイルランド生れで、残りはウェイルズ、スコットランド、マン島生れの順であつた。」(p. 33) リヴァプールの人口は一七〇〇年に五〇〇〇人、一七五〇年に二〇、〇〇〇人、一八〇一年に八〇、〇〇〇人、一八五一年に四〇三、〇〇〇人、一九〇一年には七〇九、〇〇〇人という勢で増加した。

若くしてリヴァプールに出たトマス・ブリスはこゝで事業を営みかなりの成功を収めたといわれる。そして新興の中間階級ミドルクラスに共通にみられたように、彼も亦「有能で、性格が強くまた幾分頑固なところがあつた。」<sup>(1)</sup>

(1) Mrs. Charles Booth, Charles Booth-A Memoir, London, 1918. p. I.

トマスは宗教的信条においてはユニテリアン (Unitarian) であり、政治的見解においては自由主義者 (Liberal) であつたが、彼の信条は三人の息子たちにうけつがれた。

トマスの息子の一人は商務省 (Board of Trade) の事務職員クックの長に出世し、他の一人はジョージ・スチーブンソン (George Stephenson) の発明に協力し、また自らも多くの発明を行つた。彼の記念像は今日もリヴァプールに立つてゐる。今一人が本篇の主人公の父で、同じくチャールズという名であつた。彼は兄たちほどには有能ではなかつたが、優しい心情の持主で、愛すべき性格の人であつた。彼はトマス・フレッチャー Thomas Fletcher の娘エミリー Emily

と結婚した。彼女の姉の一人は J・クロムプトン Justice Crompton に嫁し、今一人はヘンリー・ロスコー Henry Roscoe の妻となつた。有名な化学者 Sir Henry Roscoe の母である。

さて本篇の主人公チャールズ・ブースには一人の姉と二人の兄及び一人の妹があつたが、彼らが育てられた家庭環境は正に中間階級ミッドクラスに典型的なそれであつた。大きな庭園のついた、部屋数の多い家は都心をさけて郊外にたてられていた。同じ階級にあつた多くの、特に母方の、いとこたちとの間には親しい行き来があつた。ブースの父は「子供の思いつきや計画にはやさしく耳を傾け、時に批評をさしはさみはしたが、いつでも意見をきいてやるという態度であつて、計画をけなしたり、又は子供を抑えつけたりすることは決してなかつた。」<sup>(2)</sup>こうして子供たちは「積極的な進取の気象を培われたのである。」<sup>(3)</sup>

(1) 姉は大洋汽船会社 (Ocean Steamship Company) の創設者の一人フィリップ・ホルツ Philip Holt に嫁した。兄アルフレッド Alfred の子供が、のちに、ブース汽船会社 (Booth Steamship Company) の会長となる。今一人の兄は兄弟のなかではもつとも頭のよかつた人だが若くして亡くなつた。妹は終生結婚することがなかつた。

(2) Ibid, p. 6.

(3) Ibid, p. 4.

チャールズ・ブースは頭の良い方だとは考えられていながつた<sup>(1)</sup>。学校の成績はかなり良い方ではあつたけれども、決して首位の組 (First rank) に入ることはなかつた。リヴァプールの Royal Institution (一八一六年創設) の中学校 (Secondary school) を卒えたブースは直ちにランポート・ホルツ汽船会社 (Lampport and Holt's Steamship

Company) のランポートの事務所につとめることになった。こゝで彼は實際教育をうけることにしたのである。

(1) カー・ソントアーズ A. M. Carr-Saunders は述べている。「恐らく彼が利口 (clever) でなかつたが故にこそ、他の人なら違者な一般化と安易な理論へつつ走してしまふところで彼の思考は立ちどまつたのだ。」(The Economic Journal, Vol. 41, 1931, p. 438.)

### 三 実業家としてのブース

一八六六年チャールズは兄アルフレッドと共同して二隻の船を買つた。ブース汽船会社の創始である。

チャールズ・ブースは事業の成功のためにはいかなる労をも惜しまなかつた。朝早く出勤し、夜遅くまで居残つては仕事をしたといわれる。

一八七一年ブースは地位の高い官吏チャールズ・Z・マコーレー Charles Zachary Macaulay の娘メアリ Mary 結婚とした<sup>(1)</sup>。

(1) チャールズ・Z・マコーレーは有名な歴史家トマス・B・マコーレー Thomas Babington Macaulay の末弟で、彼の妻はビアトリス・ウエブの祖父リチャード・ボッター Richard Potter の娘であつた。したがつてブース夫人はビアトリスのいとこになる。この関係でビアトリスは、のちに、ブースのロンドン調査に参加することになった。

結婚ののちもブースは夜十時、十一時まで事務所に残つて仕事をするのがよくあつた。そして事業に対する彼の情熱は終生渝ることがなかつたのである。

「事業は彼にとつては一つのロマンス (romance) であつた。」<sup>(1)</sup>「家人は彼の事業を嫉妬すると笑いながらよく抗議したものであつた。」<sup>(1)</sup>

(1) Mrs. Charles Booth, op. cit., p. 37.

「実業家の生活とは、政治的・文学的又は科学的な探求にともなう面白みや魅力を欠いた、退屈なものにちがいないと想像する人たちというのは彼には不思議でならなかつた。彼にとつては、景氣の大きな振子をうごかす生きたちから、大きな企業の新しき分野の活動にはさげがたい危険、どんな事業でも余りに軽卒に始めたり又は十分な見通しをもたないで行つた場合現実にかねを失うということによつて与えられる臍を嚙ひ思い、就中一つの目的に向つて働いて居り又生活の現実にあえずふれている一団の人々との接触、全てこれらは彼をよろこばせ又魂をうばうものであつた。」<sup>(1)</sup>

(1) Ibid., p. 93.

「人の幸福の主な条件は仕事と愛情であると私は信ずる。そして自分の愛するものゝためにはたらく人はこれらの条件を最も容易にみたしている」<sup>(1)</sup>。ブースは事業経営のなかに己の幸福を見出した。実業家としての成功を求めると懸念な自分を彼は道徳的に正当化することができたからである。ブースにとつては「経営者」として有能であることはそのまゝ人間としてすぐれることであつた。彼は経営者の職能に社会的な意義を認めることができたからである。

(1) Poverty, I, p. 131 note.

ブースによれば近代的な産業制度は極めて「よい面」をもつていた。それはこの制度が非常に「能率的」なもので

あるということである。即ち、「人間の諸能力は刺激をうけ、指導されて、望まれた目的に結びつけられる。そして自然のもつ諸力はますます人間の用に服せしめられるようになる。他の制度にしてこれほどに生産的なものは未だ曾て見られなかつた。」<sup>(1)</sup>

(1) Industry, V. pp. 75~76.

近代産業制度はその有機的な性格から景気の変動を免れ得ないが、「不況の時には人間の知恵がはたらかされ、相対的に有能な経営者 (Manager) だけはよく困難に耐え得る。その結果絶えず改善が追求され、無能力者は除かれて適者生存ということになる。好況の時には改善された方法による生産の規模拡大が進められ、景気が再び悪化すればまた新しい闘いが行われる。かくて生産の低廉化が生れる。……低廉化ということは市場を保持するためと同じくこれを拡張するためにも行われる。このようにして消費者にとつて生活は楽になり、欲望の豊富化が供給者によつて組織的に進められ、生活水準は上昇する。」<sup>(1)</sup>

(1) Ibid, p. 74.

しかし近代産業においては、生産は投機と需要見込みに依存するようになった。「近代産業には、その長所にもかかわらず、特有の、調節を誤つた生活が起るのはこの故であつて、供給過多の市場と仕事のない労働者とが定期的にくり返し発生するということになるのである。」<sup>(1)</sup>

(1) Ibid, p. 75.

だから、労働者の一部は景気変動によつて難儀を蒙ることになるが、「あらゆる労働者は消費者でもある。消費者としては得

をする。したがつて生活水準はあらゆる、又は殆どあらゆる階級において上昇する。」(Ibid., p. 76.)

したがつて、「近代企業は何よりもよき指導を必要とする……賢明な指導のない労働は、それを上手に使用する力をもたない資本と同様に、何の役にもたない。頭腦を資本へ、また両者を事業経営へ適用することへの要請は従来さ程には強いものでなかつた。誰かの注文をまつて靴をつくつていた靴やには注文以外には他に何らの推進力をも必要としなかつた。手引きと云えば顧客の足の寸法をとるだけでよかつた。しかしもし生産原価の引き下げを求め、又より広い市場に供給しようと思つて、工場を建て高価な機械装置をつくり、何千という靴を生産するとすれば、今まではちがつて彼が成功するか否かは一にかゝつて堅実な判断と景氣の見通しにあることは明かであろう。もし彼が成功するならば多くの人々が彼の成功の恩恵にあづかるであらうし、失敗すればその影響は広い範囲に及ぶであらう。古い経済学者の時代にはなお原初的な(生産)方法が支配的であつた。そのことが生産の主要手段を土地・資本・及び労働とするところの、等しく原初的な分析をもたしたのであらう。経営(Management)が利潤を以てその特徴的な報酬様式とするところの、一箇の独立した最も重要な形態の産業的努力であることを示したところの一步進んだ分析は、比較的最近になつて十分な認識を得たばかりである。」<sup>(1)</sup>

(1) Ibid., p. 76.

労働には賃金が、資本には利子が、そして土地には地代が対応するように、経営には利潤が対応する関係にある。そして「利潤を得ることができたか否かゞ、労働の使用が賢明に行われたか、材料が正しく使用されたかどうかを決定する……あらゆる取引は利潤又は損失の法廷で裁かれる。そしてこの導きにしたがわぬ企業は、それが実験的又

は教育的或は博愛的な性格のものでないかぎり、どんなものでもその成功を永続せしむることも、又は有用なものでもあり得ない。」<sup>(1)</sup>「社会主義的な路線の上に立とうとする国家は、彼の見解によれば、必ずや失敗するが、それは国家公務員の経営能力の不足からよりは個人的な利潤及び損失の峻厳な法廷の欠如することから来るものだ」と彼は考えていた。」<sup>(2)</sup>

(1) Ibid., p. 77.

(2) Mrs. Charles Booth, op. cit., p. 94.

したがつて、ブースにとつて、利潤とは単に経営の動機 (Motive) たるものとどまらず、経営の適否を「最終的に」検証するものであつた。<sup>(1)</sup> 経営者は利潤の法廷の裁きにしたがうことによつてのみ自分の「指導」の正しきを期することができるのである。

(1) 「彼は贅沢な生活の手段としての金銭というものには殆ど関心をもたなかつた。贅沢というのは彼の生活のどの部分にも当てはまらざることであつた。しかし彼は事業の成功の唯一の最終的な検証 (test) としての金銭の価値というものを強く感じてゐたのである。」 (Ibid., p. 94.)

そして適正な経営が行われる時にのみ「労働」と「材料」とは無駄に「使用」されることを免れ、経営者は社会における生産力の発展と生活水準の上昇とに寄与することができる。また「肉体労働の状態と能率は頭脳力によつて果される役割に極めて密接に依存するが、全ての経営はこの頭脳力の一形態なのであり、また機械それ自体も経営の展開にすぎないのである。」<sup>(1)</sup>

(1) Industry, V, p. 78.

かくて、ブースにおいては、有能な経営者とは正に「産業の将帥」(Captain of Industry)として兵に対する将校の立場に立つべきものであつた。

しかし全ての経営者がそのまゝに産業の将帥たり得るものではなかつた。彼らのうちの選ばれたる者即ち有能なものだけにゆるさるべき地位であつた。それは努力してかく得られねばならないものであり、またそれがもつ社会的職能の故にブースにとつては、いかなる努力にも値するものであつた。

かくて資本家ブースの経済活動は彼の内面において道德化され、したがつて人間的に正当化された。実業家としての成功を求むることに彼は些かの疑惑を抱くいわれがなかつたのである。

いふまでもなく、こゝはブースの資本主義分析の当否の問わるべきところではない。「近代的産業制度」についての彼の「一般化」(generalization)が如何程の実証的なうらづけを以て行われたかは極めて疑問である。資本主義社会の機構が明かにされるためには、如何なる事実がとらえられねばならないかを考える時はこのうたがいは一層に深まつてくる。社会科学的な吟味を経ざる「事実」からの単なる一般化は不毛の実証主義に終るからである。むしろ却つてブースの社会理論は、強くその影響をうけたコント Auguste Comte (1798~1857)の理論をもつて、ヴィクトリアの繁栄のなかでの自らの資本家的経験を整理し、正当化したものといふことができる。<sup>(1)</sup>

(1) 「彼と彼の兄とが汽船会社を始めた頃、彼が最も親しかつた二人のいとこ、ハリー及びアルバート・クロンプトン Harry and Albert Crompton は Auguste Comte の熱心な使徒となつた。そしていとこたちが合えばいつでも三人は……実証哲

学の体系を、そのあらゆる点について、論じ合つた。……クロンプトン兄弟は彼らの師の学説を極めて雄弁に説いたので、チャールズ・ブリスは相当にそのとりことなつていた……コントの書いたものは彼に強い影響を与え、彼の心の中にながくその跡をとらめた。」(Mrs. Charles Booth, op. cit., pp. 8~9)「兵士のいない場合と全く同様に将校がいなくても軍隊は存在し得ない。そしてこの基本的な真理は戦争にも産業にも同じ様に当てはまる……資本家と労働者との間に自然発生的に生じたところの分業にはこのような組織の萌芽が横たわつてゐることは疑うことができない。」「もし各労働者が指揮者たるべきであるならば、或は、その経営が固定せられないで、受動的で無責任な集団に委任せられるならば、大きな仕事はどんなことだつて出来はしない。」これらの、コントからの引用は「極めてよくブリス自身の見方を代弁している」とブリス夫人は述べている。(Ibid., pp. 95~96)ブリスにおいても、資本家の労働者に対する関係は将校の兵士に対するそれとして把握され、合理化されたのである。

#### 四 民衆の問題

一 「チャールズは成人するにつれて熱心な急進派 (Radical) となり、リヴァプールにおけるこの党派の活動に参加した。」<sup>(1)</sup>一八六〇年代の後半から七〇年代のはじめにかけて、即ち彼がコントの教説に拠つて自己の思想と生活とに体系化を試みつゝあつた頃、ブリスは「政治活動のほかに、これと併せて、労働者の労働条件改善闘争を援助することに懸命となり、及ぶかぎり、その指導者たちと友人になつた。」<sup>(2)</sup>この接触のなかでブリスは一八六四年の第一インターナショナルの創立、一八六七年の第二次選挙法改革、一八七一年の労働組合法の制定をたゞかつた労働者たちの息吹きを感じないわけにはいかなかつたであろう。政治と労働運動のなかに在る労働者との接触は、彼に、自己主

張をもつて聞う生きた民衆を認識せしめたに相異なる。ブースにとつて民衆とは、支配階級に属する他の多くの人々にとつてはそうであつたところの抽象的な存在ではなくなつた。

(1) Mrs. Charles Booth, *op. cit.*, p. 6.

なお、「三二年の改革（一八三二年の選挙法改革）直後からウィッグとトーリの外に『自由主義者』と『急進主義者』とが別箇の党派として語られるようになっていたが、両者の区別は未だ明瞭ではなく、もし強いて差別を求めれば、前者は自由貿易の推進、貴族の特権の廃止につとめ、中等階級の選挙権の拡張に賛成するが、労働組合運動や工場法の制定に反対する一派であり、後者は工場立法、土地課税などに賛成する一派であつた、と云つてよいだろう。」（石上良平・英国社会思想史研究、東京・創文社、昭和三二年、三〇六頁）。

(2) *Ibid.*, p. 7.

ブースたちが婚約した頃既に彼の健康は極度にそこなわれていた。「事業での過労の上に余暇は政治と博愛の活動につぶしてしまい、食事時間も少く、睡眠時間も乏しくて、自分では無限と考へていた力をそこねて、神経性の消化不良に悩むようになっていたのである。」<sup>(1)</sup>

(1) *Ibid.*, p. 10.

一八七三年末にかけては何らかの手をうたなくては近いうちには病床につかねばならぬことがはつきりして来たので、ブースはこの年一二月妻子をつれて保養のため英国を去つた。そして一八七五年夏には帰国したが、彼の健康は仕事に耐え得る程にはまだ回復していなかつた。ブースはロンドンに居を移してそこに支社を開いた。しかし彼が少

しづゝでも仕事にかえり始めたのは一八七六年の夏が過ぎてからであつた。

一八七八年から九年にかけての不況はブースの事業をも「危機的な状態」におとしこんだ。この不況の打撃からブースが立ち直ることができたのは一八八〇年の六月頃で、この頃彼の健康もやつと旧に復することができた。<sup>(1)</sup>

(1) *Ibid.*, p. 48, p. 59 参照。

一八七〇年代の末、ブース夫妻ははじめてビアトリス・ポッターの家を訪れた。この時のブースの印象をビアトリスは次の様に回顧している。

「四〇歳に近く、背が高く、ひどくやせて、まるで釘に着物をぶら下げた感じ、胸を病む少女の顔色、そして坐業労働者にみられる僅かの猫背、高いかぎ鼻、口ひげを立て、高い喉仏がかくれぬほどに短かい、尖つた型のおごひげ、形のよい眉と大きくじつと見つめた灰色の目の印象的な顔、チャールズ・ブースは魅力のある、しかし変つた型の男であつた。……魅力的であつたのは彼の自己意識のない举措と人が何を考え、又何故そのように考えるのか、人が何を知つており、又どういう方法でそれを学んだかを知らうとする強い好奇心とであつた。そしてまた、このいままで知らなかつた個を全体の体系のなかに位置づけようとする関心があつた。<sup>(1)</sup>」

(1) *Beatrice Webb, op. cit.*, p. 219.

そしてこの頃ブースの足下では時代の激流が音高く流れ始めていた。「時は正に多くの関心を喚起せる頃であつた。人々の心は貧困者 (the poor) の地位に関連するいろいろな問題で一杯であつた。真に多様な見解が表明され、全く矛盾した性格の救済策が提起されていた。……『私的慈善を起せ。』一派は叫んだ。『税を軽減しろ、全ての悪の源こ

それは国家から給付をうける被救恤者だ』と。他の一派は云つた。『慈善をやめろ』、『慈善といふことはこそ一つのだ落となつた。労苦の人々は正に当然そうであるように食物を与えられ、住いを与えられるよう国が面倒をみる』と。するとこれへの答えはこうだつた。『労苦の人々だつて！』、『窮乏している人々は一度だつて本當に労苦したことなくありはしない。彼らは屑だ。怠け者で性悪だ。働く意志のあるものは一人だつて英国では窮乏する要はないのだ』。これらやその他の見解にチャールズ・ブースは耳を傾けた。そしてたえず熱心に次のような問い即ち『イギリスの民衆 (the people) とは誰なのか。彼らは本當にどんな生活をしているのか。彼らは本當は何を欲しているのか。彼らは善なるものを求めているのか。そして、もしそうならば、それは如何にして彼らに与えらるべきか』に対する解答を求めた<sup>(1)</sup>。

(1) Mrs. Charles Booth, op. cit., pp. 13-15.

二 ヴィクトリアの繁栄を通じて民衆の状態には改善がみられたが、不熟練の未組織労働者の多くは依然たる窮乏のなかにとり残された。しかし労働階級のなかに新しく創立され、次第にその数を増して行つた熟練労働者と「ホワイト・カラー」とが相対的に優位の階層に形成される過程は、労働階級の間における上昇的な社会移動を活発ならしめたから、貧困は多く個人的な徳性乃至は能力に結びつけて考えられた。

十九世紀の六〇年代及び七〇年代における支配階級の貧困問題に対する態度を最もよく代表していたのは慈善団体協会 (Charity Organisation Society) の指導者たちであつたが、彼らによれば、人は勤勉で儉約で正直であり、眞面目で従順でさえあるならば、他に頼らぬ生活を営み得ない筈はなかつた。したがつて「自然なる」生存闘争のきび

しさを緩らげるために、私費又は公費によつて、労働階級の経済的環境を「人為的に」変更しようとする試みは必ずやこれらの重要な徳性を破壊してしまい、大抵の場合は、本人についてはともかく、彼の属する階級の状態を前よりも悪化せしめるであろうと考へていた。自立心を培つてやることこそが本当の慈善である。したがつて何らかの扶助が与えられるとしても、その贈与の結果被扶助者当人の性格と環境に、又、彼の属する窮乏層に、現実にかゝるこゝとが起るであろうかについての正確な見通しに基いて行わるべきで、発作的、無差別的、無条件的な扶助手当は、それが施与の形態のものであらうと、救貧法の救済の形態のものであらうと、却つて弊害だけをもたらすものだとしたことであつた。

(1) 八〇年代初頭における協会の指導者は、Octavia Hill (1838~1912)、Samuel Barnett (1844~1913) W. H. Fremantle  
や Charles Stewart Loach (1849~1923) であつた。

しかし一八七三年にはじまつた大不況は多くの労働者を一挙に貧困のどろ沼のなかへ投げこむことになつた。それは労働組合のとりでのなかにあつた熟練労働者をも例外とはしなかつた。労働組合の報告による失業は一八七九年までには一パーセントから一二パーセント近くまでに上つた。特に未組織の不熟練労働者は、熟練労働者とは異つて、多少なりとも貯金をゆるすほどの賃金は、好況の時に置いてさへも、稼得することができなかつたし、また失業給付をひき出すことのできる組合基金も彼らにはなかつたのである。失業すれば私的慈善をうけるか或いは救貧法による救済をうけるよりほかに生活のすべがなかつた。しかも救貧法は労働能力者に対しては労役場 (Workhouse) へ收容するよりほかの救済を、原則として、ゆるさなかつたから、不熟練労働者にとつて社会の底は殊更に深かつたといわ

なければならぬ。彼らの間には絶望的な競争が不可避となり、それはいよいよ雇用の不規則性の激化と低賃金への縛着とをもたらすことになつた。

イギリスの労働階級特に不熟練労働者はこの大不況のなかで多くの教訓を学んだ。資本主義の落ち穂拾いに満足するならば、彼らの生活は、好況の時には楽になるとしても、一度不況に見舞われるならばどん底へ落ちこまねばならないことを、しかも一番先きに犠牲にされるのが不熟練労働者であることを、彼らは自らの体験によつて知つたのである。そしてこの広い範囲にわたつた体験こそは政治と産業の両分野における妥協的政策への批判と、更に深く資本主義の社会体制そのものへの疑問とをもたらすことになつた。かくてわれわれは八〇年代における「社会主義の復活」を迎えるのである。

一八八一年ハインドマン Henry Mayers Hyndman (1842~1921) の努力によつて結成された民主連盟 (Democratic Federation) は、一八八三年モリス William Morris を加えて、失業者の間での活動を始めた。一八八四年には社会民主連盟 (Social Democratic Federation) と改称して、はつきりした社会主義団体となり、労働組合の妥協的政策と不熟練労働者及び「下積みの人々」の窮状に対する無関心とを痛烈に非難する宣言を發した。この年の末モリスとバックス Belfort Bax らは連盟を脱退して社会主義者連盟 Socialist League を結成したが、社会民主連盟がハインドマンの追隨者とモリスの追隨者との間の争いによつて二つに分れてゐる間に、これとは異つた種類の社会主義団体が生れた、即ち、一八八四年の始めにシエー Bernard Shaw (1856~1950) やウエブ Sidney Webb (1859~1947) ら少数の「知識人」のグループはフェビアン協会 (Fabian Society) を設立して社会主義的な啓蒙活動を開始した

のである。

この大衆的な窮乏化と復活せる社会主義は、支配階級の間にピアトリスの所謂「階級的な罪意識」を強めることになつた。このような意識は貧困問題に対する支配階級の態度に動搖をもたらし、それは八〇年代にはいつて、慈善団体協会の内部における対立と論争にまで発展することになつた。即ち協会の創立（一八六九年）以来の有力な指導者であつたバーネット夫妻 Samuel and Henrietta Barnett は、悪の根源はむしろ無制約・無統制の資本主義にありとして、公共の費用と行政的干渉による施策の推進を主張するに至つた。一八八三年にはS・バーネットは一般的に国家老齡年金を唱導して、遂に一八八六年における夫妻の協会脱退を不可避たらしめた。

三 一八八〇年から八二年にかけての景氣の一時的な立ち直りによつて、漸くに彼の事業を危機的な状態から救うことに成功したチャールズ・ブリスを待つていたのが、ほかならぬこのような「論争」であつたのである。

この「論争」はブリスにとつて決して単に彼の「外部」にとどまるべきものではなかつた。けだし産業キャピタリズム・インダストリーの将帥としての自己肯定は民衆の生活向上を前提とするものであつたからである。「民衆」とは、ブリスにとつて、いわず社会的な良心たるべきものであつた。したがつて彼にとつてはこのような意味をもつた民衆の状態と、これに対する態度決定をめぐつての論争は、そのまゝ直ちに、彼の「内部」の問題であつた。ブリスはこの大きな、時代の問題に対して到底無関心たり得なかつた。

「彼は民衆の生活を改善するためのあらゆる試みに従事していた多くの人々と近づき（↑）になつた。」そのなかにはオクテイビヤ・ヒルやバーネット夫妻らのような経験ある實際家も含まれていたし、事態改善の論理的な基礎について

研究していた人々もあつた。就中いろいろな分派の社会主義者特にハインドマンの意見に耳を傾け、社会民主連盟の会合に出席したのも屢々であつた。この頃彼の友人のなかには社会主義的な見解をもつた数人の労働者もあつて、ブリスはそのうちの二人とは一種の共同研究を行ったことさえあつた。

(1) Mrs. Charles Booth, op. cit., p. 15.

「しかしチャールズ・ブリスは、依然として、提案された救済策のどれかがよく役に立つものであるかについては疑問をいだいた。それらの策の基礎となつている推論の正しさについて疑問があつたのみならず、全てがよつて以て立つべき諸事実が正確に確かめられたものであるか否かについてはより一層確信がもてなかつたからである。」<sup>(1)</sup>ブリスが問うた五つの問いに対しては彼自らが答えるよりほかはなかつたのである。

(1) Ibid., p. 16.

## 五 「ロンドンにおける民衆の生活と労働」——方法——

一 一八八六年四月十七日チャールズ・ブリスは、ピアトリス・ポッターなどの協力者と、City Office にロンドン調査のための最初の会合を開いた。<sup>(1)</sup>ピアトリスの日記には次のように誌されている、「この会の目的はセンサスの数字を基礎にして二つの方法即ち地域と雇用の別によつてロンドン社会の全体の、つまり、四マイル(百万人?)のありのまゝの写真をとること。我々はチャールズ・ブリスの入念にして詳細な作業計画と一般用の抜粋とを承認した。」

(1) Beatrice Webb, op. cit., p. 286.

ブースの「調査の全体的な計画」は次のようであつた。即ち「全人口を地域別と職業別とに分類する。ついで各地域については地方調査を、また各職業については職業調査を行う。地域調査 (district inquiry) の主な目的は民衆の生活条件を明かにすることである。しかしそれはまた彼らの雇用にもふれるであろう。職業調査 (trade inquiry) の主な目的は民衆の労働条件を明かにすることである。しかしそれは間接的に彼らの生活条件を扱うであろう。」<sup>(1)</sup>

(1) Charles Booth, *The Inhabitants of Tower Hamlets (School Board Division), their Condition and Occupations*  
J. R. S. S. Vol. 50—1887, p. 326.

ブースの内と外とにおける「論争」は、帰するところは生活と労働との間の關係にあつた。全てはこの關係についての事実が正確にたしかめられることにかゝつていた。そして「疾病の治療に當つては、その病氣の性格、程度及び病狀に関する諸事實を確認することが先づ必要である。……現実 (the actual) を觀察 (observe) し、それについて語ること」<sup>(1)</sup>、「事態をあるがままに記述すること」<sup>(2)</sup>がブースの調査の「基本的な意図」となつた。「私は諸事實を、それらが一定の瞬間に現われるまゝに、私のネガの上に定着せしめた早取写真を撮らうと試みた。」<sup>(3)</sup>

(1) Final volume, p. 215.

(2) *Religions Influences*, 1, p. 5.

(3) *Poverty*, 1, p. 26.

かくてブースの調査は靜態的方法に拠つて設計されることになつた。即ち先づ「民衆の生活と労働の、夫々の様式を同時に明かにするために、彼らを地域別と職業別とに分ける二重の方法 (double method) をとることが決定せら

れた。<sup>(1)</sup>これによつて民衆の状態は、いわざ、生活の場と労働の場とにおいて同時に観察されることが可能になる。地域調査によつては民衆がどのように生活しているかについて、また職業調査によつては民衆がどのように労働しているかについて、諸事実が確かめられる。そしてかくて得らるべき二系列の事実を相互に対置すべき方法が何らか工夫せられてあるならば、それらの間の提携又は随伴の關係を指摘することは極めて容易なことである。そしてこの方法をブースは人口の「社会的分類」(social classification)<sup>(2)</sup>に求めたのである。即ち、彼は全家族を、それぞれのもつ階級指標、つまり、「それによつて各家族の地位(position)と生活様式(manner of life)とが測定され得るところの若干の単純な事実」<sup>(3)</sup>に基いて八つの階級に分類する。そしてこの「階級」によつて生活と労働に関する全ての事実は整序せられ相関せしめられるという方法である。

(1) Poverty, I, p. 1.

(2) Final volume, p. 1.

(3) Industry, I, p. 16.

二 ブースにとつて「階級」とは彼によつて創り出さるべきものではない。それはブースによつて観察さるべきものであつた。これらの階級を生活水準によつて下から上へアルファベットのAからHまでによつて示す場合、階級A・B・C・D・は全て「貧困」(poverty)に在ると考へべきものとされた。けだし「階級Eは民衆の最大の部層を構成している。かくて他のいづれよりもわが国現在の生活方式を代表している。」<sup>(1)</sup>或はロンドン全体をとる場合、ロンドンの人間の「普通の運命」(the common lot)と考へねばならないのはEとFの階級のそれである。そしてこれ

らの階級の生活水準 (standard of life) を基準として「上又は下の諸階級のそれが放散状に乖離するのは、何らか  
幸運又は不幸な出来事 (accident) によるか、或は説明と正当化とを必要とする何らかの原因 (cause) に基<sup>(2)</sup>」とブ  
ースは考へる。たとえば病氣になつたり酒を飲んで仕事を失うことがある。彼の雇用は不規則になり階級 C (間歇的  
稼得の階級) に落ちる。「恰も階級 B (臨時的稼得の階級) が D (少額の不規則的稼得の階級) の落伍者に当るように、階級  
C は E (規則的な標準的稼得の階級) の落伍者である。<sup>(3)</sup>」或は妻が酒呑みで家族を引きずり落す場合もあろう。又景氣が  
悪くなつて失業することもある。かくてブースは階級 E 又は E と F (高賃金労働の階級) とをもつて「それを基準とし  
て上方又は下方へ、我々が社会のその他 (の階級) の貧困又は富裕 (wealth) の程度を測つてよいところの生活水準<sup>(4)</sup>」  
を代表するものと認めたのである。したがつてブースは階級 E の稼得をもつて標準的なもの (standard) と範疇づけ、  
雇用の規則的なことにおいてはこの階級と異ならざるも、その稼得のこれに達せざる階級のそれをもつて少額なる  
もの (small) として考へられる。そして貧困は階級を下るにつれて激しくなり、窮乏 (want)、更には窮迫 (dist-  
ress) をもつて表現さるべきものとなる。他方、階級 E・F は労働階級の愉樂 (comfort) を、階級 G・H は中間階  
級の富裕 (wealth) を、夫々享受するものである。ブースはこのような関係のなかにおいて各階級を夫々の地位  
(position) に位置づけることができた。彼が階級の地位に言及する場合、彼はそれによつて、このような見方に立  
つての貧困又は「愉樂の尺度 (scale of comfort) における地位<sup>(5)</sup>」を意味したのである。

(1) Industry, V, p. 329.

(2) Poverty, I, p. 157.

チャールズ・ブースのロンドン調査について

(3) Industry, V, p. 329.

(4) Poverty, I, p. 161.

(5) Industry, I, p. 11.

「現実に貧困に喘いでいる人々の問題は、本当の労働階級 (the true working classes) のそれからは切り離して考察されるべきである、富のより大きな分け前に対する後者の欲求は異つた性格のものである。この二つを一つに混同し、『飢える数百万人』について語り、そして労働階級の数千人に窮迫の数千人又は恐らくは数百人を縫合してしまふのは煽動家の企てることであり、きわもの作家のやり口である。この方法に対しては私は強く抗議する。民衆の大部分のものの生活状態が、今日現実的な窮迫に苦しんでいる人々のそれと全く同様に、改善されることを心底から望むが故に尚更そうである。これらの本質的に異つた問題を混同してしまつては、両方の解決が不可能になる。何か善いことがなされ得るのは窮迫と欲求とを溶接することによつてではないのである。<sup>(1)</sup>」

(1) J. R. S. S., Vol. 50—1887 pp. 375—6.

右に、「現実に貧困 (Poverty) に喘いでいる人々」とは階級 D・C・B・A に在る人々である。そして「民衆の大部分のもの」とは階級 E 又は E と F とに在る人々であつた。文意からして、ブースは生活条件の改善に当つて前者と後者とでは自ら異つた方法の存すべきことを、調査の当初から、明確に意識していたことが明かである。

「この階級 (E) はあらゆる形態の協同組合活動及び団結の周知の分野であり、それはその将来を自らの手に握つて<sup>(1)</sup>いる。」勿論「彼らの階級的野心 (class ambition) も、自分個人の生活をひき上げようとする努力も十分同情に

値することではある。<sup>(2)</sup>」

(1) Poverty, I, p. 51.

(2) Ibid., p. 160.

他方、貧困に在る諸階級について見るに、そこには「Bの競争がCとDとの足をひっぱり、そしてCとDとのそれがEに重くぶらさがる」という「階級関係」<sup>(2)</sup> (class relations) が成立している。したがってブースはBの錘りを取り除くことが先決問題であると考え。ただしBの競争が排除されるならば「Cには仕事が多くなり、Dの賃金は上つて、両者とも階級EとFの社会政策 (social policy) と手をつなぐことが可能となる」<sup>(3)</sup> 筈であつた。その時は労働組合と協同組合は、今日の如く労働階級の頂上に浮遊することをやめて、底辺からつくりあげられることになるであろうし、友愛組合も人口の大部分を包摂するようになるだろう。こうして「労働から貧困の最終的な離別」<sup>(4)</sup> が確保せられる。ブースはこう考えたのである。

(1) Poverty, I, p. 162. 同じところでブースは次のように説明している。「階級DとCは貧乏又は雇用の不規則なるが故に協同又は団結することができないでいるということが、彼らをして階級Eに対し重い錘りとしてぶらさがらしめている。彼らは今度は階級Bの極貧の生活によつて、より以上に苦しめられている。社会が苦しんでいる疾患は困窮者の、産業面での、無制約の競争である。……CもDも彼ら自身のためにリフト (lift) を強く必要とする、そしてこのリフトはEの進歩のためにも、又生活水準の上昇のためにも亦必要であると私は考える。」

(2) Ibid., Chapter VI, pp. 156~171. 階級関係とは「ぶらさるの階級がよつてもつて相互に對して立つところの関係」(p.

156) の謂ひである。

(c) *Ibid.*, p. 169.

(4) *Ibid.*, p. 171.

しかし果して階級Eに窮乏の問題は存在しないのであろうか。この階級の問題は単に富のより大きな分け前への欲求のそれにつきるものなのであろうか。このような批判がブースに対して直ちに向けられた。しかし今こゝで重要なことはブースの考えていた又は見ていた貧困は、それが解決されるためには、何かこれまでには知られていない新しい——Bの錘りを除く——方策を必要とする、そう云うものであつたということである。

ブース自身は「救貧法の拡張」を提案した。しかし彼の提案は遂に社会政策に実現されることはなかつた。現実には最低賃金制度や社会保険制度等ウェプ夫妻の所謂国民的最低限政策の採用であつた。そしてこれらこそは丁度この頃不熟練労働者を組織し始めた「新組合主義」の要求するところでもあつたのである。

これらの下からの諸要求に対応して、支配階級の間にも国民的最低限政策の採用を不可避とする気運が育つて行つた。ブースの現実には彼らの間に次のような認識を残すに十分であつた。即ち、何らか新しい政策によらなくては解決の困難な貧困或いは社会問題が存在していること、「個人主義」が生き残るためにはこのような貧困の解決が必要であること<sup>(1)</sup>、そしてそのためには「国家の干渉」も、これをも容認しなければならないこと、これらである。

(1) 「いつかは、我々が信頼を置いていた個人主義社会はそれ自らのために、原因の如何を問わず自らの力では一定の水準の生活を営むことのできない人々の生活の面倒をみざるを得ないことを見出すであらう。」(*Ibid.*, p. 154)「この階級(B)のこ

の上ない窮乏とふしだらな生活とが、さもなくば十分うまくやつていける人々の運命に有害な影響を与えるだけでなく又彼らは自らの生活を支えることをせず富める人及び貧しい人の慈善をうけるのみならず、彼らは国家にとつて絶えざる重荷となっている。彼らが、国税又は地方税で納めているところは、彼らがひき出す出費には比べものにならない。彼らが我國の都市に存在することは、生活及び保健の水準をひきあげるための、金のかゝるそして屢々徒勞に終る闘いをつくりだしている。」(p. 15)「救貧法制度とは何か、それは制限された形態の社会主義である……私の考えは、我々が既にその下に生活しているところの二重の制度、個人主義(Individualism)の枠内での社会主義(Socialism)をして、後者の範圍を幾分拡げ、又兩者の分業をもつとはつきりさせることによつて、従来以上に能率的なものたらしめることである。我々の個人主義は我々の社会主義が不完全であるが故に失敗している。国家社会主義(State Socialism)は無能力者の生活の面倒を見てやることに本来的な職務があるのであり、それを完全に行うことによつて我々を重大な危険から救つてくれるのである。個人主義体制は現にみるように崩れて行き、あらゆる面で社会主義的な改革によつて侵される、しかしそのがん丈な教理は、自立し得ざる人々を追放した社会においてこそはるかによい機会をもつことであろう。」(p. 167)

三 残念なことにはチャールズ・ブリスは彼の調査の方法論をのこすことをしなかつた。このことについてはあとで今一度触れなければならぬが、とに角そのため我々は彼の「社会的分類」についても、その方法論的な説明を直接にブリスから聞くことはできないのである。したがつて我々がブリスの「階級」とはどのような性格のものであり、また彼の社会的分類がどのように行われたかを知り得るのは、彼が八層の階級分類を基礎に置くことによつていかなる事実への接近を行つたか、またそのための調査のデザインがいかなる仮説の先行を示唆しているかなどの分析を試みることによつてのみである。

さてブースが彼の調査の全体系のなかで「社会的分類」の果すべき役割にいか程の重みをかけていたかについては十分の認識が必要である。ブースにとつては社会的分類はとりも直さず「社会分析の方法」(method of social analysis)にはかならなかつた。<sup>(1)</sup> けだし「それによつて各家族の地位と生活様式とが測定され得るところの若干の事実を記録し、これをセンサスの数字に結びつけるという企て」——全人口の社会的分類——「は大きな社会的興味をもつところの比較を可能ならしめ、又社会の現実的な構造 (the actual structure of society) への探求の大きな分野を開発するものと考えられる」<sup>(2)</sup> からであつた。

(1) Religious Influences, I, p. 4.

(2) Industry, I, p. 16.

かくてブースはロンドン社会の構造をその階級構造の分析を通じて把握しようとする。彼にとつては階級は社会的實在であり、人々は階級として存在し、その生活は階級関係によつて規定せられる筈であつた。そうだとすれば「イギリスの民衆とは誰なのか」ということは彼らの階級の地位を明かにすることによつて最もよく示されることになる。そして各階級の生活条件が示されるならば、それこそが、「彼等は本當にどんな生活をしているのか」ということへの回答である。「彼らは本當は何を欲しているのか」ということが、階級関係の分析によらないでどうして客観的に把握せられ得ようか。労働又は社会運動の背後にあり、それが解決されることがなくては問題の眞の解決にはならないであろうやうなもの、それは階級関係のなかに見出されなければならない。そしてこのことのみが「彼らの求めているものが善なるものなのか」、どうかの批判の根拠を与えるであらうし、「もしそうならば、それは如何にして彼らに

与えられるべきか」ということに答えることもできる。そうであればこそ、「私の目的は貧困、惨苦及び墮落が、規則的な収入と相対的な愉楽とに対してもつところの、数字に現わし得るかぎりでの関係 (numerical relation) を明かにし、また各階級の生活の一般的な状態を述べようとするのであつた。」<sup>(1)</sup>「私は存在する諸悪に対して靈妙な効能のある救済策を何か提示しようというのではない。私の事實は何らかの見解を支持するために蒐められたものではなかつた。たゞ私が主張するのは馬鹿げた行為をさけるためにも、また賢明なる行為を進めるためにも、何よりも先づ大きい見方 (large view) をすること、そして夫々の階級が相互に対してもつところの関係をあらゆる意味において理解することが必要だということである。」<sup>(2)</sup>

(1) Poverty, I, p. 6.

ブーリスは「量的な値を与えることのできない事實は一つも利用すまいという決心」をしていた。勿論彼は「世界をうごかす力は情感 (feeling) の強さにあるのであつて統計のなかにではない」ことをよく知つていた、「しかしそれが世界を正しくうごかさんとするならば、この力は統計によつて導かれねばならない」とブーリスは考えたのである。(Ibid., p. 178.)

(2) J. R. S. S. Vol. 51—1888, p. 278.

このようなブーリスの目的が達せられるためには先づ彼は各家族を夫々応当の階級へくゝること即ち社会的分類から始めなければならない。そして実際彼はそうしたのである。問題はこの社会的分類に當つていかなる階級指標を採用するかということである。ブーリスはこの場合「社会的な体裁を保つた、他に頼らない生活」<sup>(1)</sup> (Decent independent life) を中心に置いて考へる。生活の「社会的体裁」の具体的な内容は階級 E 又は E と F との生活によつて規定され

るものであるから、これらの階級の生活水準をもつて貧困又は富裕の測定の基準と考へるブースにとつてはこれは極めて自然な着想であつた。そしてこれによつて見れば、階級CとDとの収入はこのような生活に足ることは足るがそれは辛うじてのことであり、階級AとBとの収入は「この国における通常の生活水準によればこれに足らざるもの」と考へられた。したがつてブースの『貧困者』とは生活必需品を手にいれてなお家計の帖尻を合わせるには苦勞をすゝる生活だと云つてよく、他方『極貧者』は慢性的な窮乏のなかで生活しているのである。即ちブースは自分の力では社会的な体裁を保つた生活を営み得ないものをもつて極貧者としたのである。

(1) Poverty, I, p. 33.

しかし調査の客観性又は判定の統一性を保持するためには指標の数量化をはかる必要がある。そこでブースは『貧困』ということばによつて中位の大きさの家族の場合過当り十八志から二十一志というような、僅少ではあるが十分規則的な所得を有する人々を現わし、又『極貧』によつては何らかの原因からこの水準以下に落ちてゐる人々を云う<sup>(1)</sup>ことにした。そしてこの数字をもつて「貧乏の線」(the line of poverty)としたのである。

(1) J. R. S. S. Vol. 50—1887, p. 328.

ブースが王立統計協会の報告会でこの数字を発表した時、リーヴァイ教授 Leone Levi (1821~1888) は「一週十八志から二十志という所得は……人を貧困の状態に置くものではない。このような人々が貧困だという見方は、生計費の点からは正当化されるものではない」と批判した。(Ibid. p. 334) しかし他方にはこれと逆の批判もあつた。即ち「ブース氏が彼の統計表のなかにでゝいる人々のうち最高の賃金をうけているものでさえも生活苦と困窮とを正しく認識しているかどうか——彼

がこれらの人々の食物・衣服・寝具の乏しさを考慮にいかたかどうかは疑わしい。」又、タワー・ハムレットについての報告書全体が「余りにも事態の自己満足的なブルジョア的な叙述のように読める」というのである。しかしブリスは彼の「貧困の定義を変更すべき理由を何ら見出さなかつた」のである。(J. R. S. S. Vol. 51~1888, p. 278.)

ブリスがこの十八志から二十一志という数字をいかにして得来つたかということについては彼自身は何ら積極的な説明を行つていない。しかし我々はブリスの社会的分類の手つゞきを今少しく詳細に観察することによつてその次第を推定することはできる。

四 ブリスは作業仮説として「民衆がどのような条件の下に生活しているかということは主として彼がどのような条件の下で労働しているかによつてきまる」と考えていた。彼がこのような仮説に立つていたことは彼の調査のデザインにも明かである。この仮説に立てば、民衆が収入と地位とにおいていくつかの階級に分化するということは、これらの階級を構成すべき人々が夫々集団として、労働の場において相互に質的に異つた地位に立つからでなくてはならないことになる。

したがつてブリスは、民衆を「雇用の性格」(character of employment)によつて区分すると同時に「収入と地位」によつて区分することにもなるような単一の分類を求めた。しかし一般的には「雇用による分類をどう試みても民衆を収入によつて区分することには役立たないということによつて二重の区分を行うことを余儀なくされた」ので、「全人口は先づ世帯主の雇用の性格によつて約四十の部層 (sections) に区分せられ、ついで各部層の人々を収入と地位とによつて八つの階級に配分することによつて再区分が行われる」ことになつた。ブリスはこの方法によつて自

分の仮説を検証するよりほかなかつたのである。

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 328.

しかしブースは不熟練労働の分野においてはこれら二つの区分を一つにすることができたのである。即ち「普通の  
不熟練労働 (ordinary labour) の六つの区分においては、これらの区分が初めの (AからFまでの) 六つの階級と相  
互に等しくなるように行われて、二つの分類は相互に接近して一つになつて<sup>(1)</sup>いる。」この関係をブースの基本的な表  
——部層と階級の表 (Table of Sections and Classes)<sup>(2)</sup> について見れば次のようである。即ち部層1 (最下層・浮浪  
者、など) は全て階級Aに、そして部層2 (臨時日雇労働) は全て階級Bに、夫々格づけられている。部層3 (不規則勞  
働) はその大部分即ち七〇%が階級Cに、二〇%が階級Bに、残りの一〇%が階級Eに格づけられている。この部層  
の人々は通常請負仕事で働き、季節又は雇用の性質によつて就職したり離職したりする。「彼らは、ならして、もし規  
則的就労にあるならば部層5に数えられるだろうような人々である。」<sup>(3)</sup> したがつて特に高い賃金をうけるものは部  
層5に格づけられている。次に部層4 (規則的就労・低賃金) は全て階級Dに格づけられる。この部層には「その労働  
が日給ならびに臨時雇の賃率で支払われるが、その地位はかなり安定しており、その稼得が實際上固定しているよう  
な人々」即ち「直接間接に雇用の優先権をもつている臨時のドック及び水際労働者の良い方<sup>(4)</sup>の端」がはいつてい  
る。その他こゝには週二一志をこえない賃金で年間を通じて規則的に就労している人々も含められている。したがつて前  
者は臨時雇であるという点において後者ならびに部層5 (規則的就労・標準賃金) に対し明確な差異を有するものであ  
るが、後者は規則的就労即ち常備であることににおいては部層5と範疇を一にしている。したがつてこれらの人々につ

いては賃金水準において差別を試みたのであるから、「部層5と4との間のどこに線をひくべきかを決定することが困難<sup>(6)</sup>」であつたのは当然である。部層5には規則的週労で過当り二二志から三〇志を稼得する人々が全部含まれ、原則として階級Eに格づけられる。しかし「このうちには賃金が低限に近かつたり、又は家族が多くて貧乏の線より上には引きあげられていない人々が若干(一八%)存在している<sup>(6)</sup>」。部層6(組長及び責任を伴う仕事)は全て階級Fに格づけられる。これらの人々は「産業軍の下士官」であり、「一般に物事を雇主の見地からながめる<sup>(7)</sup>」点において他の全ての部層から区別せられる存在である。

(1) Ibid., p. 328.

(2) Ibid., pp. 330~331

(3) Ibid., p. 337.

(4) Ibid. p. 339.

(5) Ibid., p. 334.

(6) Ibid., p. 340.

(7) Ibid., p. 341.

不熟練労働の六つの区分が、AからFまでの六つの階級に「調和」するように行われ、「(熟練労働者から区別せられるものとしての)不熟練労働階級」(the labouring class)の構成が一義的に把握せられた次第は上述のところ明かであらう。

(1) Ibid., p. 337.

これら二つの分類を「調和」せしめるブースの思考過程を跡づけることは彼の社会的分類を理解する上において極めて有用である。

先づ、ブースの思考の基底となつたものを、彼の諸部層についての記述のなかに、指摘すると、それは組長→常用労働者→優先的雇用の臨時労働者→本当の臨時労働者の系列である。のちにピアトリス・ポッターはドックの被用者について、これらの間の「差別が、ドックのみならず水際雇用を通じてみられるところであり、また東ロンドンの最も重要な労働形成においてつくりあげられているところであるので、これらの社会階層 (social strata) を区別する比較的大きな特徴を述べ、またこれらがどのような経済的、社会的及び道德的条件の下に形成され、存在しているか、その重なるものについて述べようと試みる<sup>(1)</sup>」のであるが、この系列での「等級」(grades)の存在についてはブース自身も十分認識していたところであつた。<sup>(2)</sup>

(1) Poverty, IV, pp. 21~22.

(2) J. R. S. S. Vol. 50~1887, pp. 363~4. 「ドックにおける雇用」の項参照。

ブースはこの系列にしたがつて不熟練労働の部層区分を行う。即ち先づ次の如くである。

組長——常用労働者——優先雇用の臨時労働者——本当の臨時労働者  
部層 6 = 部層 5 = 部層 4 = 部層 2

そして常用労働者のうち、その賃金水準が優先的雇用の臨時労働者のそれに等しいものは部層 4 に格づけ、収入に

おいてはこれと同等であるが、請負仕事などでその就労の不規則なものを部層3に位置せしめた。更に「殆ど賃金稼得者とは呼びにくいような人々」即ち最下層の臨時労働者、浮浪者、などを部層1と置いたのである。

そしてこの場合ブースの考慮のなかにあつたものこそは、「部層5の全体が標準的賃金で規則的就労にあるところの不熟練労働階級の大きな部分を示すものとして教訓的である」こと、又部層2が「一種の『景気測定器』(“distress-meter”)であり<sup>(1)</sup>」それは「人々がそこに生れ、生活し、そして死ぬところのものというよりはむしろ精神的、道徳的又は肉体的理由からこれより良い仕事のできない人々の貯水池である」こと、「多くのものが不健康の故に部層5から部層3に転落している」ことなどである。ただしブースはこれらの事實に基いて次の如く思考をすゝめる。即ち、部層5の生活水準はそれが多数者のそれであり、又労働階級のあるものが部層4以下の生活水準に落ちるのは何らか不幸な出来事によるか、或は説明と正当化とを必要とする何らかの原因に基くものであるが故に、部層5の生活水準こそはこの階級に「普通の運命」と考うべきであると同時に、これを享受し得ざるものこそ貧困に在るものと考えなければならぬ。この意味においてこそ、部層5の賃金は標準的なものであり、部層4のそれは低賃金である。そしてこの貧困の程度には部層3と2との間において質的な差異が認められる。即ち、部層2以下にあつてはもはや自分の力では「社会的な体裁を保つた生活」が不可能になつてゐる。であればこそ、同じ臨時労働者を優先雇用をうけるものと、本当の臨時労働者に分ち、夫々部層3と2とに格づける意味があつたのである。このような関係のなかにおいて各部層の占める地位を表示するにブースは「階級」をもつてしたのである。即ち、各部層は夫々対応の階級に格づけられることによつて、貧困又は愉樂の尺度における地位に位置づけられ、そのような地位にあるが故にこそ各部

層は「階級的野心」等において相互に自己を区別し、一定の階級関係の下に相互に対して立つことになるのである。

(1) Ibid., p. 336.

(2) Ibid., p. 337.

(3) Ibid., p. 339.

かくてブースは不熟練労働階級が彼の六つの「階級」又はピアトリスの所謂「社会階層」から構成されていることを明かにした。そして彼の階級はすぐれて「社会的地位」(social position)<sup>(1)</sup>を意味するものであつたが故にこれを全社会に一般化することは容易であつた。勿論この時にはなお更にブースの「諸階級は決して同質的なものではなく」なり、「夫々のなかに多くの等級の社会階層 (social rank) が存在する」<sup>(2)</sup>ことになる。このことについては後に再び触れるであろうが、かくして把握される階級構造がブースにとつて有意義な社会分析に役立つかぎりにおいて、彼は不熟練労働階級の分析のなから得來つた階級概念をそのままに一般化するのである。即ち、「これら(階級)の定義は不熟練労働の諸部層と密接な關係に置かれ」<sup>(3)</sup>、「最初の(不熟練労働の)、六つの部層の一般的な特徴は、対応する諸階級を記述するに用いられる」<sup>(4)</sup>ことになつたのである。

(1) Industry, I, p. 3.

(2) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 333.

(3) Ibid., p. 328.

(4) Ibid. 334.

かくして得られた階級の定義にしたがつて、ブースは全人口の社会的分類をすゝめる。そして今や階級指標としての「中位の大きさの家族の場合一週十八志乃至二一志の所得」がどこから得られたものであろうかは、もはやこゝに改めて云う必要もない。それは部層4の賃金水準でなければならぬ。この部層の基体たるところの、優先的に雇用される、ドックの臨時労働者の稼得は週当り一五志から二〇志であつた<sup>(1)</sup>。そして同じくこの部層に属する、ガス工場の不熟練労働者のそれなどを考慮して、ブースは十八志から二〇志の線を導出したと考へなければならぬ。

(1) Poverty, IV, p. 26.

しかし各家族について「正確な所得を確認することは必ずしも可能ではない。」したがつて「分類が家庭の全般的な概観 (General appearance) に基いて行われる」<sup>(1)</sup>ことになつたことはブースにとつて止むを得ないことであつた。

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 328.

五 かくてブースは全人口の社会的分類の方法の問題を解決することができた。残された問題は各家族についての情報を如何にして入手するかということであつた。殆ど一〇〇万に近い家族を対象とする巨大な調査が、一人の調査家によつては勿論、普通の調査グループによつても、十年の歳月をかけてなおこれが完了を期待し得ないことは明かであつた。何かほかの手段が見つけられねばならなかつた。そしてこれを、ブースは、ウェブ夫妻の所謂「間接的面接の方法」(Method of Wholesale Interviewing)<sup>(1)</sup>に求めたのである。

(1) Sidney and Beatrice Webb, Industrial Democracy, London, 1897, 1920 ed., p. xxviii.

「私がこの仕事に着手する時の基本的な考えは、私の必要とするあらゆる事実が既に誰かには分つているというこ

と、そしてその情報が単に蒐められ、組み立てらるべきだということであつた。<sup>(1)</sup>即ち「情報を手にいれるに當つて私は直接調査をさけることにした。そしてむしろ自分が述べようとする人々の間で自らも生活しているような人々から得られるものを統合することをもつて目的とした……必要な情報は否定しがたい形で存在しており、一ヶ所に蒐めさえすればよいのだと確信していた。」<sup>(2)</sup>

(1) Final Volume, p. 32.

(2) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 327.

一つの示唆がビアトリス・ポッターから与えられた。彼女はチェムバレン Joseph Chamberlain (1836~1914) の次のような経験をブースに伝えたのである。即ちチェムバレンがバーミンガム Birmingham におけるスラム清掃計画をたてる際は彼は学校委員会の家庭訪問員 (school Board visitors) が職掌柄各家庭についてもつている情報を利用して極めて役に立つたこと、そして彼はこの知識の源泉を開発することのできる人は豊かなみのりを刈りとることができることを発見したのであつた。

ブースはこの例に倣うことにして、訪問員に面接して自分の調査対象について必要な情報の提供をうける許可を求めた。そして訪問員から提供された情報は更に次の人々を通じての「間接的面接」によつて照合され訂正されるというのがブースの計画であつた。その人々とは、警官、徴税吏員、衛生検査官、学校の教師、慈善団体協会の調査員、労働組合及び共済組合の事務担当者等であつた。

かくてブースは「間接的面接の方法」によつて各家庭の、観察による、情報を得ることができるとしてこれらの

情報にもとづいて全ての家庭を夫々応当の階級に分類する方法も確立されている。もはやブースは彼の偉大な仕事をはじめることが出来る。調査の基本的なデザインも完成された。協力者を集めての第一回の打合せも終つた。学校委員会の訪問員に面接して各家庭について情報をあつめることを始めればよいのである。

こうしてブースの「ロンドンにおける民衆の生活と労働」の、そしてその後十七ヶ年にもおよぶことになつた大調査が開始された。そして十七巻五五〇〇頁をこえる報告書も亦こゝから始まつているのである。

## 六 「ロンドンにおける民衆の生活と労働」——体系——

一 ブースのロンドン調査は先づ東ロンドンの一学区「Tower Hamlets」から始められた。けだし「ロンドンのこの部分こそはイギリスにおいて最も窮乏した人口をかゝえており、いわざ富裕のなかの貧困 (poverty in the midst of wealth) の問題の焦点であると思われた」からである。そしてこの問題こそは「多くの人々の心を痛めている」<sup>(1)</sup>ばかりでなく、ブースの社会的良心そのものがためさるべき問題であつた。民衆の惨苦が他方における——ブースをも含めた——富裕と分ちがたく結びついているとすればブースの生活の道徳的な正当化は何らの根拠のない独りよがりではないことになる。自分の立つている——産業<sup>キャプティヴ・インダストリー</sup>の将帥としての——社会的立場が、実は民衆の「貧困と惨苦と墮落」とによつて支えられているとすれば、ブースはどうしてこの立場に生きる己を正当化し得よう。

(1) Ibid., p. 374.

しかし、だからと言って、ブースは社会主義者の見解を正しいと考えることができない。現代の産業組織ほどに  
チャールズ・ブースのロンドン調査について

「生産的な」制度が他に考えられるであろうか。こゝでは社会の生産力はたかまり民衆の生活水準はひきあげられた。そしてそれを確保したものを「利潤の法廷」の裁きではなかつたのか。ブースはヴィクトリアの繁栄のなかで自分の目で見て来たこと、体験したことを否定することができなかつた。

しかし現に見るように社会主義が復活しひろまつてゆく勢いにさえあることは、そこにそれだけの理由があるからでなくてはならない。「社会主義の理論——人間の本质を軽視し又人間生活の基本的な諸事実を全て無視した、無智から出る情熱的な示唆——は、どうしようもないという意識 (sense of helplessness) から生れる。」<sup>(1)</sup>即ち「貧困者の労働条件の不利なことや貧困悪についてはどうしようもないという意識が大きく存在している。賃金稼得者は彼らの仕事を調節しようもなく又彼らが提供する意志のある労働に対して公正な等価を得ることもできない。製造業者や商人は競争の枠のなかでのみ仕事をする事ができる。富者は新しい窮乏を生みださないようににはそれを救済しようがない。」<sup>(2)</sup>

(1) Ibid., 376.

(2) Poverty, I, pp. 6~7.

だが果してどうしようもないのであろうか。「このどうしようもないという意識を救うためには人間生活の諸問題がもつとよく明かにされることが必要である。正統派の、同様に非正統派の経済学の先験的な推論 (a priori reasoning) は現実性の欠如の故に失敗している。その根底には観察に基づく生活事実とは極めて不完全な関連しかもたない一連の仮説が横たわつている。」<sup>(1)</sup> あらためて民衆の生活と労働の本当の姿をうつした写真をとる必要がある。そして

このような写真をとることの可能性をこそブースは示唆したかつたのである。

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 376.

「東ロンドンは恐ろしい絵——飢えた子供たち、困苦の女たち、過重労働の男たち、泥酔と悪徳の恐ろしさ、非人間的な怪物や悪魔、病氣や絶望の巨人——が画かれた垂れ幕の背後にかくれてみえなく横たわっている。これらの絵は背後に横たわっているものを本当に示していたか。或はそれらが、事実に対してもつ関係は、どこか田舎の市で掛け小屋の表の絵がなかの芸当や見世物に対してもつているそれに似たものなのか。我々はこの垂れ幕をひきあげてみよう<sup>(1)</sup>と試みた。」

(1) Poverty, I, p. 172.

あらゆる先入感から解放されて生活の実態をあるがまゝに把握すること、このことにこそブースの課題があつた。彼が「先づしなければならぬことは、どのような理由からであれ現に貧困又は困窮の生活状態にある人員に関する<sup>(1)</sup>ことである。」だが一体何をもつて貧困となすべきか。貧困とは一定の「社会的地位」である。そして夫々の地位に立つ人間集団が「階級」であつた。このことは既に見たところである。そうだとすればブースは何よりも先づ全人口の「社会的分類」を行つて、こゝにおける階級構成を明かにしなければならぬ。そしてこのあとでは「階級関係」の分析はブースの直接的な観察の下に行われることが容易となる。即ち人々が、或は労働の場において、或は生活の場において、相互にとり結ぶ社会関係に夫々彼らが占める地位を、彼らの階級的地位に結びつけて観察し、整序する。そしてこの方法によつて、現実にはたらいっている階級規定は実証的に把握されることになるのである。

(1) Ibid., I, p. 33.

かくてブースの調査は先づは各家族の社会的分類に集中され、その結果を「部層と階級の表」即ち部層別、階級別人員表に提示することに向けられたのである。Tower Hamlets の地方調査——そして「この調査は地方調査の実例を示すために行われた」<sup>(1)</sup>のであるが——の結果は、一八八七年五月王立統計協会 (Royal Statistical Society) の報告会において「Tower Hamlets (学区) の住民、彼らの状態と職業」として発表された。しかし「その成果は余りにも不完全で満足できないものであつた。多くの点で仕上げが必要であり、東ロンドンの全体を調査単位とし、それに十分な時間を与えた方がよいと思われた」<sup>(2)</sup>。その結果は、翌年五月あらためて、「東ロンドン及びハックニの民衆の状態と職業、一八八七年」として同じところで発表された。そしてこれら両調査の焦点は「部層と階級の表」におかれており、それは「ロンドンにおける民衆の生活と労働」の巻頭に収められたのである。

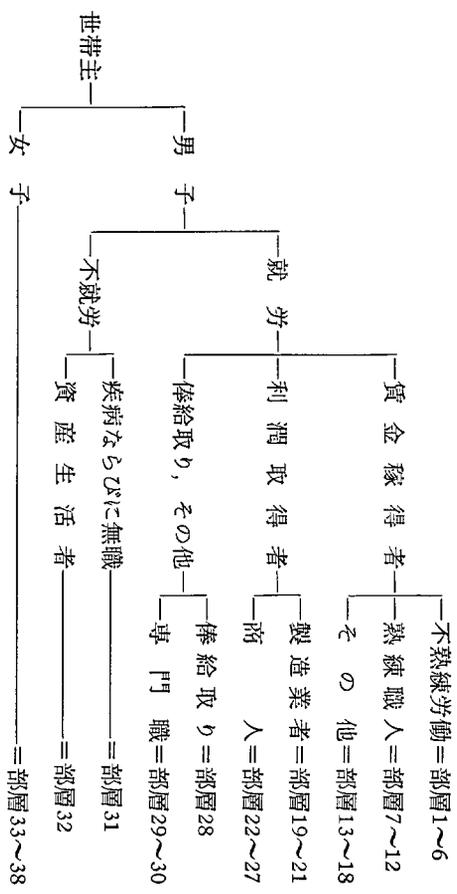
(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 327.

(2) J. R. S. S. Vol. 51~1888, p. 277.

「分類」の方法の問題は既に解決されていた。「階級」については既に詳述したところであるから、こゝでは「部層」区分について簡単に述べることにする。

ブースが世帯主の雇用の性格によつて先づ全人口を約四十の部層に区分し、更に各部層の人々を収入と地位とによつて八つの階級へ再区分したことは既に述べた。ブースはこの再区分のすがたを表示することによつて、民衆の「生活」は主として「労働」によつて規定されるという彼の仮説を実証することができると思つた。

先ず、ブースの部層区分がどのように行われているかを表示するに次の如くである。



先ず世帯主は性別によつて区分せられる。次に男子世帯主の場合、彼らは就労しているものと不就労のものに区分される。後者は慢性的な疾病・職業を有しない者ならびに資産によつて生活する者<sup>(1)</sup>とに区分される。「雇用と収入とに関する地位を考へる場合、時間の単位としては一ヶ年間がとられた」から、こゝには失業者については直接的な情報は与えられていない。第三に就労している男子世帯主は先づ大きく賃金稼得者 (wage earners)、利潤取得者

(profit earners)」、及び俸給取り、専門職の三つに区分せられる。賃金稼得者は不熟練労働 (labour)、熟練職人 (artisan)、その他 (鉄道従業員、店員等) に区分される。不熟練労働の六つの部層が最初の六つの階級と相互に対応するように行われたことは既に述べた。熟練職人その他は職種によつて細分されている。最後に利潤取得者には、公衆に直接する関係において共通であるが故に、極貧の花売り娘や街頭芸人が大きな雇用主などと一緒に包含されているが、大きくは製造業者と商人とに二分せられ、夫々は主として規模によつて細分されている。

(1) Poverty, I, p. 44 note.

一 さて、ブースの調査委員は学校委員会の訪問員に面接して各家族について必要な情報を集めた。そしてこの情報に基いて夫々の家族の部層と階級の判定が行われた。彼らのノートは次頁の様な記入で埋められて行つたのである。<sup>(1)</sup>

(1) Ibid., pp. 7~11.

これらのノートから「部層と階級の表」が作成されるのは極めて容易なことである。そしてブースの表は貧困の大きさと深さとをその全き姿において示すことができた。即ちブースは云う。「単なる数字を見るにも二つの方法がある。その何れをとるかによつて同じ事実でも異つた印象が生れる……正しく判断するためには比率と実数の両方に留意して、比率を考える場合には実数を忘れないように、又実数を考える場合には比率を忘れないようにすることが必要である。<sup>(1)</sup>」貧困の大きさがこのような形で示されるのはブースの方法によつて始めて可能であつた。

(1) Ibid., pp. 177~178.

ブースの表によれば貧困者 (階級 A、B、C、D) のうち九〇%は賃金稼得者の諸部層に属していた。貧困は専ら勞

セント・ヒュバート街 (階級A——地図採色・黒)

		階級	部層
チャールズ・ブリスのロンドン調査について	1. 臨時労働者……………1部屋……………学童2……………B		2
	(現在ホップ採集)		
	日雇掃除婦……………1部屋……………寡婦, 学童1, 幼児1, B		33
	(姉同居)		
	—————1部屋……………1家族, 学童なし, ———		
	2. 靴職人……………1部屋……………妻手伝, 学童2, C		11
	臨時労働者……………1部屋……………学童1, 幼児2, A		1
	(極めて低い層の家族, 授産学校在学中, 1.)		
	?……………1部屋……………学童1, B		35
	行商人……………1部屋……………学童3, A		22
(交つた性格)			
—————1部屋……………1家族, 学童なし,			
(1部屋空室)			
3. 行商人(女)……………1部屋……………学童3, B		35	
(夫, 在監中, 母同居, 性格に問題あり)			

一般的特徴……………恐るべき場所!この地域では最もひどい街。住民は大部分は最下層の人々である,そして清潔とか体裁とかいう観念は全く欠如しているものの如くである。一部屋以上を使つている家族は殆どない。子供たちは何か仕事につくことができるようには育てられていなく,浮浪して歩いている。そして次代のどろ棒や不良の核をなしていることは疑いない。家具は全て極く古く,また家の見境がつかない程につぎはぎだらけで,元の形がなくなつている。小さな後庭は増築に使われてしまつている。家はすみからすみまで極めて悪い状態にあり,非衛生で過住である。又(何故こんなにも修繕が殆どなされてないかの理由を示唆しているものとして)極く最近まで家主が衛生検査官の兄であつたといわれている。多くの部屋には公然たる売春婦が住んでいる。

働階級の問題であり、労働階級の四〇%が貧困に冒されていることが明かとなつた。ばく露された事實はブースを驚かすに十分であつた。<sup>(1)</sup>

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 375.

しかしタワー・ハムレットの調査結果が発表された時、L・リーヴァイ教授 Leone Levi は「著者は賭博や飲酒のような貧困原因について述べていない、又彼の扱う地域の平均賃金にもふれていない」と批判した。<sup>(1)</sup> 彼自身の印象では、こゝに述べられた地域に固有の貧困は、本当に仕事がないとか低賃金によるというよりは、悪徳、贅沢、及び浪費によつて、或は多くの場合不道徳な習慣の結果仕事には向かなくなつたことによつて生れることの方が多いと思われた。同じ席上で S・ボーン Stephen Bourne も、「社会のいろいろな階級の道徳的地位 (moral position) についでる調査が決定的に必要な<sup>(2)</sup>」と批判した。彼も亦「国内の多くの窮乏は貧困階級の不道徳な行為から発生することが極めて多いと信じている」からであつた。

(1) Ibid, p. 394.

(2) Ibid, p. 397.

翌年、調査が東ロンドン全体に拡大され、その結果が発表された時、ブースは極貧の原因を階級 A・B について、又貧困の原因を階級 C・D について、夫々分析を行つた。この結果明かになつたことは、貧困の単一の原因として最大なもの、前者の場合、臨時的就労 (全体の四三%)、後者の場合不規則稼得 (同じく四三%) であるということであつた。このような「雇用の問題」と、疾病・多子家族等の「環境の問題」が貧困の大部分 (八六%と八七%) を説明し

た。<sup>(1)</sup>こゝにブースの仮説は極めて積極的に証明されたわけである。

(1) J. R. S. S. Vol. 51~1888, p. 295, Poverty, I, p. 147.

東ロンドンの調査においてブースは更に「諸階級の割合」を地域別に比較して市民の生活条件の地域差を明かにし、また諸施設たとえばクラブなどの会員が誰であるかを階級によつて分析してその特徴を示すことができた。このほかこの地方調査に重要な主題は階級関係であつたが、この問題については既に述べたところで十分であろう。

ブースの調査はやがて東ロンドンを離れて次第にロンドン全市に及び、とりあげられる主題の範囲も漸次広げられて行つた。そして「諸地域の貧困を、その広がり(extent)によつて、又同時にその強さ(intensity)によつて比較することを可能ならしめるため『貧乏の線』より上及び下にあるものの総数の百分比と同時に階級別のそれが与えられた。」<sup>(1)</sup>

(1) Poverty, II, p. 33.

ブースの調査のうち「恐らく最も印象に残る業績であり、またたしかに全調査のうちで最も絵画的な所産であつたところのもの」<sup>(1)</sup>は貧困地図(Poverty Map)であつた。これは、その住民の階級分類に即応して各街路を七つに分類し、これらを夫々異つた色で彩つたもので、ブースはこれによつて「地図の上に全首都の惨苦、貧困、愉樂及び贅沢の程度、地域別分布、及び正確な所在地までもをグラフに表わすことができた。」<sup>(2)</sup>ロンドンの全家族の経済的、社会的環境が、現実的な資料に基いて、一連の地図の上に表示されたのである。

(1) Beatrice Webb, op. cit., p. 239.

チャールズ・ブースのロンドン調査について

(2) Ibid., p. 240.

ブースの関心は更に「労働階級 (working classes) 向きに建てられたブロック住宅」が「性格に与える影響」から、「人口の流入」、「ユダヤ人社会」の構造に及び、更に学童の階級分類を行つて、それとの関連において、彼らに与えられる教育機会を分析し、最後に貧困と特に関係の深い東ロンドンの職業に言及して、彼の所謂地域調査を終えている。

三 さて、「ロンドンにおける民衆の生活と労働」は「貧困」、「産業」及び「宗教的影響」の三つのシリーズから成つている。即ち第一のシリーズにおいては「民衆はどのように生活しているか」——地域調査——が示され、第二のシリーズにおいて「彼らがどのように働いているか」——職業調査——が明かにされている。これらに対して第三のシリーズにおいては、「民衆の状態が種々の社会行為 (social action) によつて、よかれ悪しかれ、どのように影響されているか」が分析されている。<sup>(1)</sup>

(1) Industry, V, p. 339.

これら三つの調査のうち、前の二つはブースの所謂「二重の調査方法」の一方を夫々に担うものとして不可分の関係にある。そしてこれら二つのシリーズが一体となつて、治療の方法を決定するに先立つて患者の状態について注意深い診断を行つたものであるとすれば、第三のシリーズは、現在の治療を更につゞけるか又は斥けるかということの前提として、現に採用されている治療策によつてもたらされている現実的な効果を観察したものである<sup>(1)</sup>ことができる。

(1) 「賢明なものたるか否かを問わず多くの種類の救済策が今日の程度採用されているかを示し、こうしてどんな行為が更

に一層又は新しく進めらるべきかを決定しようと試みる前に、今日行われつゝあることの棚卸しを行い又現実に作用している諸機関 (agencies) や諸影響力 (influences) が現在の事態に与えている諸効果を跡づけようと思ふ。」(Ibid., pp. 338~339.)

ブースの「二重の方法」は民衆の状態を生活と労働の二つの面において明かにすると同時にこれらの二つの間の關係を示すことにその目的があつた。

したがつて地域調査による生活条件の究明が常に労働条件との関連において行われたように、職業調査による労働条件の究明はたえず生活条件との関連において行われる。そしてこの「関連」を確保するものこそが人口の社会的分類であつた。

ブースの社会的分類は産業シリーズ即ち職業調査においては全く新しい方法によつて行われている。即ち、一八九一年センサスにおいては五部屋以下の家に住んでいる世帯主は使用している部屋数を、また家事使用人を雇つている世帯主は使用人数を夫々申告することになつていたので、ブースはこの結果に基いて次のような社会的分類を行うことにした。「一家族五部屋以下の家に住んでいる人口の場合、その分類は各部屋当りの人数に基いて行われ、家事使用人を雇つている場合は一使用人当り家族人員に基いて分類される。他方五部屋以上の家に住んでいるが使用人を雇つていない人々は中央の階級を形成する。」<sup>(1)</sup>

(1) Industry, I, p. 2.

この新しい分類を前のものに比較するに「その似ていることは驚くほどであつた。」<sup>(1)</sup> 勿論密住 (crowding) ということが常に必ず貧困と一致するものではなく、また「所得或は階級の問題というよりは家族構成上の偶然」<sup>(2)</sup>によつて、

たとえば家事のできる娘がいるので、使用人を雇つてはいないが、しかし十分富裕である家族も存在する。しかし大量観察の場合には部屋数及び使用人数は「それによつて各家族の地位と生活様式とが測定され得べき単純な事実」即ち「生活類型の殆ど絶対的な指標」<sup>(3)</sup>であると考へても正しいと思われた。

(1) Ibid., p. 10.

(2) Ibid., p. 15.

(3) Ibid., p. 13.

そうだとすれば「新しい分類は事実の直接的算定に基くものである」だけに「単に意見 (opinion) に基く、即ち、学校委員会の訪問員その他が自らその間に生活して働いている人々の、愉楽の尺度における、地位について見聞したところによつてうけた印象に基礎をおいている」「当初の分類」<sup>(1)</sup>に比してより客観的であるということが出来る。

(1) Ibid., p. 11.

したがつてブリスはこの方法によつて各職業グループの人々の社会的分類を行つて、その職業グループの人々に与えられる「社会的条件」(social condition)を検討することにした。一つの職業グループの人々がいかなる階級区分に編成されているかはその職業の社会的条件を示すものと考えられたのである。そして「センサスのなかに社会的条件の『共通の尺度』を見出そうと試みた時の (ブリスの) 直接的な目的が、ロンドンの生活条件を、いろいろな産業及びその給与との関連において、研究することであつた」<sup>(1)</sup>ことは云うまでもない。

(1) Ibid., p. 19.

したがつて職業調査においては各職業については労働力構成、雇用条件、衛生状態、組合活動などとともにその社会的条件が詳細に調査せられ、これらに基いて総体としての労働条件が明かにせられると同時に、その諸階級に対する関連が示されている。「平均的な密住がかなり公正な貧困の尺度を提供すると想定してもよい」<sup>(1)</sup>から、これによつてみれば、どの産業に相対的により多くの貧困者が含まれているかは一目にして瞭然となつた。又「全部の職業を一緒にすれば、一般的原則として、密住の線 (line of crowding) は賃金が二五志以下である労働者の割合と一致して<sup>(2)</sup>いる」から「ロンドンにおける貧乏の線は、密住を試薬として認める場合、以前に設定した数字 (二一志) より少し上のところにあるように思われる」<sup>(3)</sup>。しかし雇用の不規則なることによつて「極めて多くの職業において名目的収入のかなりの部分が全くうけとられていないのであり、したがつて賃金率に基く統計は非常に当てにならないことを認めねばならない」<sup>(4)</sup>ことも明かになつた。

(1) Industry, V. p. 4.

(2) Ibid., p. 18.

(3) Ibid., p. 25.

(4) Ibid., p. 27.

四 「これらの調査(地域調査と職業調査)は完了した、私が当初自らに課した仕事は終つたのである。けれども私はそのまゝに終ることに満足できなかつた。けだし恰も日々の生活が家庭の性格、教育又はレクリエーションの機会及び雇用の機会によつて規定せられるように、正に生活構造(structure of life)の一部を形成するところの、その

他の社会的影響が存在している。そして事態のあるがまゝの姿を写すことを完了するためにはこれらについて若干述べておくことが必要である<sup>(1)</sup>。

(1) Religions Influence, I, p. 4.

これらの影響のなかでは宗教が最も重要であると考えられたので、ブースは先づ組織的な宗教活動の調査をとりあげこれに最大の努力を傾けた。即ち彼は「民衆がどの程度に教義を信じ修業につとめ又宗教団体の活動に参加しているか、また彼らの生活にもたらされた又はもたらされたと見える効果<sup>(1)</sup>」を調査した。その他の組織的な社会的及び博愛的活動についても同様であつた。更に地方当局、救貧委員会及び地方行政委員会の活動が民衆の状態にどのような影響を与えているかも調査せられた。

(1) Ibid., p. 5.

この調査は先づ地域単位にすゝめられ、最後に一般的な要約が行われている。

地域調査においては先づ人口の増減傾向、密度、性別年齢別構成、世帯の構成、世帯主の出生地及び従業上の地位（使用部屋数又は使用人数による）人口の社会的分類等の統計に基いてその地域の人口の一般的な特徴が示される。次に民衆の宗教への反応が調べられ、それが階級によつて夫々異なることが明かにされている。貧困地図の「色彩は、全体として、その地域の社会的な特徴と同時に、これに劣らず宗教的な特徴をもよく示していた。街が赤で彩色されているところ（一人又は二人の使用人を雇っている中間階級の住宅地）では能動的な社会生活と結びついて活潑な中間階級的宗教活動の展開を見る。街が桃色であるところ（階級E・Fを主とし、中間階級の下の入つているところ）では宗教面では

比較的空白である。色が青であるところ(階級C・D以下の地帯)には多くの伝導活動がみられるが、段々と色が濃くなつて黒(最下層)くなるにつれて益々その仕事は絶望的になる。以上の概括的な結論からのがれるところはな<sup>(1)</sup>い。」

(1) Ibid., p. 149.

これらの地域調査にもとづいてブースは宗教その他の影響の概括を行う。驚く程の努力が浪費され又その方向が間違えられており、殆どあらゆる教区において宗教を無関心な人々に強いようと試みている一隊の男女がある。しかも彼らは惜しみなくそのために身を献けている原因と人々とをむしろより悪化せしめている。このような印象を残してブースの調査は終つている。

五 いうまでもなく、こゝはブースの広汎な調査の内容を紹介すべきところではない。意図はあくまでもブースの方法の把握にあつたのである。そして今やロンドン調査の全体系を貫いて彼の「社会的分類」の果している役割は十分に明かである。実に「この分類こそは全調査の基底であつたのである。」<sup>(1)</sup>

(1) Sir Hubert Llewellyn Smith (Director), 'The New Survey of London Life and Labour, 9 vols., London, 1930 ~35, Vol. I, p. 3.

## 七 結 び

一 既に一言したように、不幸にしてチャールズ・ブースは彼の調査の方法論をのこすことをしなかつた。一つに  
チャールズ・ブースのロンドン調査について

は彼の控え目な性格によるものであつたであらうし、また一つには彼の方法の生みだした成果の偉大であつたことが、その方法についての弁護や説明を必要としなかつたということもあつたであらう。しかしより決定的にはブースの調査が彼の豊かな社会的な感覚に支えられ、彼はその感覚に忠実に調査を方向づけ限定することができたのであり、したがつて彼の方法はブースにとつてむしろ自明であり必然であつて、必ずしも方法的な反省を必要としなかつたからであるといわなければならない。

ブースにおいては調査の展開は彼の胸中に湧きこぼれる問題意識によつて導かれた。「真に彼の好奇心は——それが好奇心と呼ばれ得るならば——改善の可能性への滅ぶことなき期待によつて拍車をかけられ強くなつた。彼にとつては『天駆ける鷲・希望は未明の空に輝いていたし、またそれは冷たく正確な調査の途を照すことをあやまたなかつた。』<sup>(1)</sup>

(1) Mrs. Charles Booth, op. cit., p.104.

しかしブースにとつて自明であり必然であつたことも、たとえば、彼の「徒弟」としての立場にあつたピアトリス・ポッターにとつては、それは論理化されることなくしては理解できることではなかつた。

夙にブースの調査の最初の段階において、ピアトリスは「直接的な観察 (Personal observation) の統計的調査 (Statistical enquiry) に対する正しい関係とは何か」<sup>(1)</sup> について方法的な模索を試みざるを得なかつた。

(1) Beatrice Webb, op. cit., p. 286.

「技術的な細部についての叙述がいかに正確で又完全であつても、ドックの門前で又は苦汗産業の職場での出来

事の描写がいかに生々としたものであつても、私は常にチャールズ・ブースの疑惑的なまなざしと次のような質問をうけた。即ち『あなたが今述べているような条件の下にあるのは何人位か。』『彼らの人数はふえつゝあるのか又は減少しつゝあるのか。』『彼らはそれより悪い又は良い条件で労働したり生活したりしているものに対してどんな割合になるのか。』『このいわゆる苦汗制度はロンドン四〇〇万の人々の産業組織のなかで如何なる重要な役割を果しているのか』と。かくて私は観察又は実験からひき出されるあらゆる結論は関連する統計によつて限定されると同時に立証されねばならないことに気がついた。<sup>(1)</sup>即ち「全てオリヂナルな調査研究においては社会的な事実を研究する者は直接観察を統計的な調査に結びつけねばならない。一方において彼は差別的な属性と特殊な状態とを認識しなければならぬ。そのあとではじめて彼はこれらの属性をもち又はこれらの状態において生きている人々を数えることができる。他方彼の観察が社会的事実であるためには、彼はこれらの属性又は状態が社会の構成要素を形成するに足るほどの人間集団に特有なものであることを示す必要がある……直接観察を伴わない統計的調査は確乎たる根拠を全て欠如するものである。他方統計調査を伴わないかぎり直接観察は立証のある結論をもたらずものではない。」<sup>(2)</sup>

(1) Ibid., pp. 339~40.

(2) Ibid., pp. 419~20.

このような論理化を経由することができてはじめてビアトリスはブースの批判を理解することができた。そしてこのことは我々にとつても同じである。

我々はブースの方法のもたらした成果の偉大であつたことを否定することはできない。しかしそのことは我々がブ

ースの方法から直ちに社会研究の方法を抽象することをゆるすものではない。彼の方法の背後には豊かな社会的な感覚があつた。勿論それは方法以前のことには属する。しかし我々がブースの仕事のなかに社会研究の方法を学ぼうとするならば、彼の方法とともに、それを支えた社会的感覚をも含めて全体として彼の現実接近を理解することが大切である。ただしブースにとつては方法以前に属する問題も我々においては方法の問題として解決されなければならないからである。

二 さて、ブースの調査の基底が彼の「社会的分類」にあつたことは既に明かにされたところである。そして彼にとつては人口の社会的分類は決して単なる統計的操作であつてはならなかつた。一定の家族が特定の階級に分類されるのは、それらの家族が一つの社会的過程を通じて特定の階級へ編成されるということが現にあるからでなくてはならない。しからざるかぎりその階級は単なる統計的集団にすぎないものになつてしまうからである。ブースはこの社会的過程を労働の場に求めた。彼が夫々の家族を世帯主の雇用の性格によつて各部層へ区分し、更に各部層の人々をそれぞれの階級へ再区分するところを行つたのはこの故でなければならない。

しかしブースが各家族の属すべき部層と階級との判定に当つてこの社会的過程をどの程度につきとめて、それを行つたかについては彼の叙述のなかに必ずしも明かではない。むしろ我々はこの問題を追及することによつて彼の方法の限界を知ることができる。

ブースの社会的分類が先ず不熟練労働のそれから始められたことは既に見たとおりである。そして他の部層の人々がこれらの諸階級へ分類されるに当つては、「同等の収入を有するものとしてそこへ含められ<sup>(1)</sup>」たり、又は「社会的

部層と階級の表（東ロンドン及びハックニー）

階級 部層	極 貧		貧 困		愉 楽		裕 福		総数
	A 最下層	B 臨時 稼得	C 不規則 稼得	D 規則的 低収入	E 標準 稼得	F 高給 職	G 中間 の下	H 中間 の上	
総 数	100	100	100	100	100	100	100	100	100
賃金稼得者	96	90	82	91	85	51	0	0	76
利潤取得者	4 (4)	7 (7)	15 (12)	7 (4)	9	30	66	60	16
俸給生活者	0	1	2	2	5	17	32	38	7
疾病無職	0	2	1	0	0	0	0	0	1
資産生活者	0	0	0	0	1	2	2	2	0

※ 括弧内は家内工業と露店商人のみ。

(socially) にも、又経済的 (financially) にも同じような位置におかれていたものとして算入される」という方法がとられている。

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 332.

(2) Ibid., p. 333.

ブースはこのような方法によつてどの程度にまで階級の同質性を確保し得たであろうか。いまブースの「部層と階級の表」を上表に整理して、各階級の同質性を、そのなかに占める賃金稼得者の割合によつて示すと、階級Aは九六%、Bは九〇%、Cは八二%、Dは九一%、Eは八五%、Fは五一%となる。

(1) Poverty, I, pp. 34~35.

しかる表中利潤取得者のうち家内工業と露店商人についてブースは次の事実を指摘している。即ち先ずブースは、他人を雇わない家内工業の部層のうち、階級CとBとに配分されるものに言及して「貧困と生活様式という点では、これらは全て部層2（臨時日雇労働）及び3（不規則労働）又は最も貧困な熟練職人と殆ど異るところがない。そして自営のできない時は雇われて働くことが屢々である」ことを明か

にしている。同じことは露店商人についてもみられるのであつて、「これらの人々の生活は臨時労働者のそれに極めてよく似ている。部層 1 (最下層) にみられる浮き沈みも幾分かは存在している。彼らは手から口への生活をし又ホップ採集に雇われる。<sup>(2)</sup>」即ちブリスはこれらの部層のうち貧乏線より下に在る人々が労働市場において賃金稼得者と同じ地位に立つものであることに注意しているのである。したがつて彼らを賃金稼得者に加えて前述の数字を示すならば、階級の同質性は A は一〇〇%、B は九七%、C は九四%、D は九五%、E は八五%、F は五一%となる。

(1) J. R. S. S. Vol. 50~1887, p. 344.

(2) ditto.

したがつてブリスは階級 E について次の如く云わざるを得なかつた。即ち、「極く一般的な言い方においてのみこの人間集団は一つの階級を形成しているのであつて、この一般性の下には性格、利害、及び生活方式の広範な差異が横わつていと云われねばならない。」このことは階級 F についても云い得ることであるが、こゝでは賃金稼得者の間にすら断層がある。即ち F に含まれる賃金稼得者は不熟練労働の部層 6 と高度の熟練職人から成つてゐるが、これら「二つの間には大きな差異がある。普通の不熟練労働の組長は一般に物事を雇主の見地からながめるが、他方熟練職人は被用者の見地から物事をながめる。このことに関連して組長は大方の富裕な職人よりも満足せる人々である。」<sup>(1)</sup>

(1) Ibid., p. 333.

かくてブリスの階級は貧乏線より上に位するものにおいて大きな異質性を残している。しかもなおそれらが一つの階級を形成する理由即ち社会的過程についてブリスは何らの説明も行つていない。それは何故であつたらうか。こ

のことを最もよく明かにするのは彼の階級関係の分析である。

ブースは階級関係によつて諸階級がよつて以て相互に対して立つところの関係を意味した。しかし実際において彼が探求した階級関係は階級A・B・C・D及び階級E・Fの賃金稼得者部分間のそれに限定されていた。即ちそれは「Bの(労働市場における)競争がCとDとの足をひつぱり、CとDとのそれがEに重くのしかゝつてゐる」という関係であつた。そしてブースの分析はこれ以上——たとえば中間階級(G・H)に属する雇用主と、これに雇われるものとしての賃金稼得者との間の関係——には及ばなかつた。ブースにはその必要がなかつたのである。ブースは彼の階級関係の分析によつて次のことを知つた。「貧困者の貧困は主として極貧者の競争の結果である」と。そしてブースにとつてはこれで十分であつた。彼は貧困問題解決の方向を見出すことができたからである。即ち、「この極貧階級を日々の生存闘争から全く解放することが問題の唯一の解決である」と。そこでブースは「救貧法の拡張」を提案する。「階級B(臨時的稼得の階級)を効果的に処理すること——恰も我々が家庭では老齢者、幼若者及び病人の面倒をみるように、国家が無力・無能な人々の面倒をみ、自らを養う力のない人々を保護すること——は不可能なことにように思われるかも知れない、しかしこれ以外に自尊心ある労働(者)に十分な報酬を得せしめ又国民により高い生活水準を得させる方法はない。」<sup>(1)</sup>

(1) Poverty, I, p. 165.

この「提案」が社会主義者によつて反対されたことには、ブースには、まだ納得できるところがあつたかも知れない。しかし「個人主義者」からも支持をうけることができなかった、その理由をブースは果してよく理解できたであ

ろうか。

ブースの「救貧法の拡張」の上にはいわゆる「劣等待遇の原則」(Principle of Less Eligibility)が磐石の重みをもつてのしかゝつていた。こゝに劣等待遇の原則とは労働能力ある被救恤者の状態は自立せる最下層の労働者のそれよりもなお望ましくない(Less eligible)ものでなければならぬという原則であり、それは一八三四年の救貧法改正以来イギリス救貧法当局の公然たる政策となつていた。被救恤階層の状態が自立せる労働者の状態より上にひきあげられるにつれて自立せる階級の状態はひき下げられる、即ち彼らの勤勉は損われ、彼らの雇用は不安定となり、その賃金報酬は減せられる。したがつてこれらの人々は働くよりは救済をうけようという強い誘引をうけることになる。被救恤階層が正しい地位に、即ち自立せる労働者の状態より下に置かれる時は前と逆の効果が生れる。これがこの原則を支えた考え方であつた。「つまりは他の一方をあからさまに刑罰的なものたらしめることによつて、飢餓の鞭を雇主の手に確保せんとするものであつた」<sup>(1)</sup>から、ブースが「この計画を採用するとしても、それが怠惰を奨励したり、エネルギーの源を涸らすだろうと怖れる理由はない」<sup>(2)</sup>ことを強調したにもかゝらず、ついにそれは政策化されることとなくして終つたのである。

(1) Beatrice Webb, *Our Partnership*, London, 1948, p. 319.

(2) *Poverty*, I, p. 166.

この劣等待遇の原則が実は賃金制度下における公的扶助の限界を行政原則に定式化せるものにすぎないとすれば、ブースがこの認識に到達することがなかつたのは彼が労使関係Ⅱ賃労働関係を分析することがなかつたからであると

いなければならぬ。ブースの改良主義がそれを妨げたのである。この立場からすれば民衆の問題は貧困の問題として解決されるべきものであつた。そういうものとして解決される何らかの方途が見つけだされねばならなかつた。そしてブースは労働市場における階級BのC・Dに対する、又C・DのEに対する競争関係を見出した。これは本来賃金稼得者の各層間の関係であつたが、これら各層の階級の地位は夫々B・C・D及びEにあると同時に彼らはこれらの諸階級の殆ど全てを占める勢力であつた。したがつて貧困の原因が主としてこれらの階級間の競争関係にあると考へることは事實に適うものゝように見えた。かくてブースは貧困の原因を、したがつてその解決の方向を発見した。彼の問題意識は充たされたのである。ブースの階級関係の分析がこれ以上にすゝめられねばならぬ必要はなかつた。分析はこゝで中斷せられることになつた。

かくて雇用者と被用者との関係はブースによつてとりあげられることなくして終つた。階級GとHに属する利潤取得者の夫々七〇%と八〇%を占め、これらの階級全体の四五%と五〇%に当る雇用者は、その他の利潤取得者及び俸給生活者と合体されることによつて、その姿を消すことになつた。もはや階級G・Hはそのものとしては労使関係の担い手たり得なくなつた。労使関係はブースの社会的分類によつて隠蔽されてしまつた。これとともに階級G・Hの階級としての意味は極めて一般的なもの、したがつて稀薄なものになつてしまつた。これらは、階級B・C・D及びEにおけるような生々とした観察をゆるさなくなつた。階級G・Hがそもいかなる次元において一つの階級であるのか、或はブースは特定の家族をこの階級に統合する社会的過程を何に見出していたのか、彼の叙述のなかでは明かでない。明かにする必要がなかつたからであるが、又明かにし得なかつたからでもあろう。何れにせよ我々がもしブ

ースの方法をそのままに踏襲する時はブースに起つたと同じことが我々にも起るであろうことは確かである。ブースの定義にしたがつてとらえられた諸「階級」をいか程相互に関係づけて観察してみても、そこからは決して労使関係の姿は現われてこないであろう。

三 チャールズ・ブースは、多くの先駆者がそうであるように、豊かな可能性を内にひそめて我々の前に立つている。ピアトリスとともに我々も亦「徒弟」として彼に学ばんとするならば、何よりも先ず彼の「手順」を分析してそれを彼に即して、即ち彼の思想や態度によつて理解しなければならぬ。けだし内在的批判が可能になるのはこの方法によつてのみである。本篇の意図はこゝにあつた。

ブースの調査の基底は人口の社会的分類に在つた。したがつてこの社会的分類の理解に大きな努力が払われた。ロンドン調査は「部層と階級の表」を提示することから始められているが、これらの分類がいかなる理論的な根拠に基づくものであるかについてはブースは積極的な議論を残していない。したがつてブースがいかにしてこの分類に到達したのであろうかを分析してその合理性を探つてみることに重要に思われた。いまその跡をふりかえつて見るに次の如くであつた。

先ずブースの調査にとつて社会的分類は何故必要であつたか。次にブースは「階級」によつて何を意味したか。第三にブースは「階級」によつていかなる社会的事実を把握したか。第四にブースは社会的分類に如何程の重みをかけていたか。第五に社会的分類に当つていかなる指標を用いたか。それをブースは如何にして得來つたか。これに関連してブースの階級概念が「不熟練労働階級」の部層区分の上に立つものであることが明かにされた。第六にこの社会

的分類はいかにロンドン調査の全体系を貫いて基底としての役割を果たしたか。そして最後にブースの社会的分類は一つの重要な階級関係即ち賃労働関係を反映していないこと。そしてそれにはブースの「改良主義」に責があることが明かにされた。

ブースの改良主義的な態度が彼の調査において果たした役割については十分な注意が向けられねばならない。それは積極的及び消極的の二面の役割を果している。

先ず、この立場はブースをして、貧困を個人的な徳性乃至能力に結びつけて考えるところの伝統的な貧困観から自らを解放せしめたのである。この「解放」があつたからこそブースは、「どのような理由からであれ、現に貧困に喘いでいる人々」を、他方における「富裕」を生みだしている、その同じ社会に置いて観察することができた。この解放自体はブースにとつては彼の調査以前に属する事柄である。しかしそのことの果した大きな役割を知る者は、この「解放」を己の方法のなかに確立することの意義をうたがうことができない。あらゆる先入感から解放された観察をもたらず方法としてブースの「手法」を反省してみることが彼の「徒弟」にとつては極めて有用な「修業」である。ブースが社会の階級構造を媒介として貧困問題へ接近しようとしたことは彼が伝統的な貧困観から解放されていたからであるにちがいないが、しかしそのブースの「手法」は徒弟にとつては、貧困を一定の先入感から脱して客観的に観察する方法として「合理化」され得るのではあるまいか。

しかしブースの階級構造分析に一定の限界をもたしたのも亦彼の改良主義的な態度であつた。それは彼の社会的分類の前提たるべき階級形成の社会的過程の究明に不徹底と曖昧さをもたしたのである。即ち、階級関係につ

いてのブースの分析は諸家族が「階級」による媒介を通じて一つの全体社会へ統合されることを実証するものであったが、この統合の社会的過程の分析は彼の改良主義的な立場の故に早急な中斷をうけてしまった。

我々がそれらによつて諸家族を分類する時それが社会の階級区分をもたらずような、そのような「簡単な諸事実」を入念に観察すべきこと、そしてこれらの諸事実が階級指標として適当なものであるかどうかは、先ずそれらによつてその社会の全家族を分類することが可能であり、次に区分された諸階級が、彼らの間の関係によつて、一定の社会現象を説明し得るような存在であるかどうかによつて実証されるものである。ブースはこう教えている。

しかしブースはこれらの「簡単な諸事実」即ち階級指標を「貧困又は愉樂の尺度における地位」又は「使用部屋数と家事使用人数」とすることによつて、彼は不熟練労働階級の六つの区分においてもつていたような分類の社会的な基礎を見失つてしまつた。

ブースの社会的分類において、階級G・Hに属する諸家族がそれぞれこれらの階級に統合されるような次元がどのようなものであるかについてはブースは何も述べていないが、少くともこれらG・Hが、生産過程において「労働階級」を対極とする関係に立つような階級でないことは明かである。したがつてこれらに属する諸家族が夫々G・Hの階級に統合されるような次元において自らも階級たるべきところのE・D・C・Bの間にはブースが分析したような階級関係は本来求めらるべきものではない。しかし現にブースがこれらの諸階級の間に「競争」関係を観察することができたのは、これらの階級が労働の場においても又生活の場においても、即ち異つた次元においてなお同一の「階級」に分類され得るような集団であつたからでなくてはならない。

かくて我々はブースの所謂「簡単な諸事実」又はピアトリスの所謂「差別的な屬性」が生活のいかなる次元に求められねばならないかという問題に逢着することになる。人間の生活がいくつかの次元から成るものだとすれば、夫々の次元における社会的分類が構造的に統一される過程が明かにされなければならない。

そしてブースの調査が実証したことが、「労働」は「生活」を規定し、又階級規定が「宗教」をも貫いていることであつたとすれば、我々が先ず求めなければならないのは「労働」の次元における人口の社会的分類であろうことは明かである。そうだとすれば我々の仕事はブースがその分析を中斷した丁度そのところから始められなければならないことになる。そしてこの社会的分類を基底として、夫々の生活次元における社会的分類が構造的に統一される過程が明かにされる時こそ我々の社会構造の把握が完了する時である。